

北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策の検討に関する有識者会議（第3回）
議事録

1. 日時：令和7年7月13日（日）14:55～17:40
2. 場所：中標津経済センター2階多目的ホール（オンライン開催併用）
3. 出席者：

（構成員）

- | | |
|-----------|--|
| 楓 千里 | 國學院大學観光まちづくり学部教授
元・株式会社JTBパブリッシング取締役 |
| 佐々木 亨 | 北海道大学名誉教授・北海道大学総合博物館資料部研究員
合同会社エ・バリュー共同代表 |
| 本間 由佳 | 明星大学デザイン学部准教授 |
| 座長 矢ヶ崎 紀子 | 東京女子大学現代教養学部経済経営学科教授
国土審議会北海道開発分科会特別委員 |
| 渡邊 英徳 | 東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授
東京大学コミュニケーション戦略本部・副本部長 |

（オブザーバー）

北海道総務部北方領土対策本部

（北方領土対策課 山田課長、金野課長補佐）

北海道北方領土対策根室地域本部北方領土対策室（佐々木室長）

根室市（北方領土・国際交流部北方領土対策課 荒井課長、齊藤主査）

別海町（総合政策課 佐藤主幹、友貞主任）

中標津町（総務部政策推進課 谷口主幹、水戸部北方領土対策係長）

標津町（企画政策課 西山係長）

羅臼町（企画財政課 遠嶋係長）

外務省欧州局ロシア課（有馬主査）

国土交通省北海道局（三宅企画調整官、藤井開発専門官）

独立行政法人北方領土問題対策協会（梶原専門官）

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

（内閣府）

三浦 健太郎 内閣府北方対策本部審議官

小林 明生 内閣府北方対策本部参事官

4. 議題：

開会

1 現地視察報告

2 ヒアリング

- | | |
|---------|--|
| 得能 宏 氏 | 元島民（色丹島出身） |
| 本見 泰敬 氏 | 千島歯舞諸島居住者連盟羅臼支部 副支部長
同 後継者の会事務局長 |
| 半田 つくし氏 | 元・根室高校北方領土根室研究会会長、元島民4世 |
| 清野 信也 氏 | 国土交通省北海道運輸局観光部 次長 |
| 長野 博樹 氏 | 公益社団法人北海道観光機構事業企画本部プロモーション部
担当部長 |
| 小野 哲也 氏 | 鮭の聖地メナシネットワーク事務局 総括事務局長
標津町教育委員会 生涯学習課長 |
| 村田 一貴 氏 | 中標津町教育委員会 学芸係長（学芸員）
北海道総務部北方領土対策本部 |

3 中間とりまとめ（骨子案）

閉会

5. 配布資料：

議事次第

- 資料1 現地視察報告
- 資料2 本見泰敬氏説明資料
- 資料3 半田つくし氏説明資料
- 資料4 清野信也氏説明資料
- 資料5 長野博樹氏説明資料
- 資料6 小野哲也氏説明資料
- 資料7 村田一貴氏説明資料
- 資料8 北海道総務部北方領土対策本部説明資料
- 資料9 中間とりまとめ（骨子案）
- 参考資料1 観光データ
- 参考資料2 移住者向け施策・広報資料

6. 議事録：

○矢ヶ崎座長 これから、北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策の検討に関する有識者会議の第3回会合を開催いたします。構成員及びオブザーバーの皆様におかれましては、日曜日にもかかわらず、本有識者会議に御出席いただき誠にありがとうございます。本日の会議は、北方領土隣接地域であります中標津町で開催しております。

本日は、まず、事務局から、6月22～23日に行われた現地視察の報告を行います。続きまして、北海道関係者からのヒアリングとして、最初に元島民の得能宏さん、それから後継者の本見泰敬さん、半田つくしさんから北方領土返還要求運動や北方領土問題の啓発活動の取組についてお話を頂戴したいと思っております。その次に、国土交通省北海道運輸局観光部の清野信也さん、そして公益社団法人北海道観光機構の長野博樹さんから、北海道の観光の取組についてお話をいただきます。続きまして、標津町教育委員会の小野哲也さん、中標津町教育委員会の村田一貴さん、北海道総務部北方領土対策本部から、北方領土隣接地域の観光資源などをいかした地域一体となった地域振興にも資する取組について、それぞれお話が続きます。お話の後に質疑応答を行ってまいりたいと思います。その後、内閣府から中間とりまとめの骨子案について説明を行いまして、おおむね16時50分めに終了ができたというふうに思っております。盛り沢山ですが、どうぞよろしく願いいたします。では、まず、現地視察について事務局から御報告ください。お願いいたします。

○事務局 それでは事務局から、第2回有識者会議、現地視察について御報告をさせていただきます。お手元の資料1、1ページ目を御覧ください。北方領土隣接地域には、北方領土問題についての啓発施設が複数所在しております。現地視察では、有識者会議における議論が現地の実情を踏まえたものとなるべく、構成員の先生方にこれらの啓発施設を訪れていただきました。

現地視察では、1日目に納沙布岬から北方領土を視察した後、北方館・望郷の家、根室市北方領土資料館、北海道立北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）を視察いたしました。また、2日目には、別海北方展望塔、北方領土館、標津サーモン科学館、羅臼国後展望塔を視察いたしました。現地では地元自治体をはじめとする関係者の皆様より、施設の概要や展示内容、啓発施設で行われている啓発活動等について、御説明をいただきました。御対応いただきました関係者の皆様に、改めて御礼を申し上げます。

2ページ目以降では、それぞれの施設について、当日の説明の概要や所感をごく簡潔にまとめさせていただきます。北方館・望郷の家では、北方領土の地理や北方領土問題の歴史的経緯、元島民の望郷の思いなど、北方領土及び北方領土問題についての概略的な説明を伺いました。続いて根室市北方領土資料館では、戦前の北方領土での暮らしを、当時の写真・映像・実物資料などから伺い知ることができました。元島民にゆかりのある資料が、多数展示されていることが印象的でした。

続きまして、北海道立北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）では、豊富な実物資料や視聴覚資料を通して、北方四島の歴史、戦前の四島の暮らし、四島との交流、四島の今について知ることができました。展示室のほか、交流ホールや視聴覚室といった設備も充実しておりました。

続きまして、別海北方展望塔は、啓発施設と観光施設の双方の機能を併せ持っており、道の駅は地域おこし協力隊により、地域の観光資源をいかした運営が行われておりました。実際に地域おこし協力隊の方からお話を伺いました。

続きまして、北方領土館では豊富な写真資料から、昭和20年当時の北方四島での人々の暮らしや、ビザなし交流を通じた地元の方と四島在住ロシア人との交流の様子を伺うことができました。地元在住の元島民による語り部活動の拠点となっていることが印象的でした。

続きまして、標津サーモン科学館では、標津町を象徴する鮭の生態から文化までを幅広く学び、体験することができました。

続きまして、羅臼国後展望塔は、高台に立地し、屋上から国後塔の雄大な姿を望むことができました。施設では元島民による語り部の映像が流れており、一世の実体験に基づく貴重な語りを次世代につなぐ取組が行われていることが印象的でした。

まとめになります。これらの現地視察を踏まえまして、北方領土問題に関する効果的な啓発のあり方について、引き続き議論を深めていければというふうに存じます。事務局の報告は以上になります。

○矢ヶ崎座長 簡潔に御報告いただきました。現地視察に参加された委員の皆様方から、お一人ずつ感想を頂戴していきたいと思えます。時間の関係上、1分ぐらいでお願いしたいと思えますので、どうぞよろしく願いいたします。楓先生から順にお願いいたします。

○楓構成員 先日の視察では、御案内いただきありがとうございました。時間の関係で簡潔に申し上げます。

いくつかの資料館を拝見した中で、最も印象的だったのは、館内で説明をしてくださった職員の方が、御自身が元島民三世の方であったり、あるいは元島民の方々のお話を直接御存じであったりし、それを私たちに語ってくださったことです。語り部活動とは異なりますが、それ以前に、資料館を日々支えている方自身の語りが深く伝わり印象に残りましたし、今後もそうした語り資料館の基盤を支えていくのではないかと感じました。

また、別海町の資料館は、観光施設とセットになっている点が非常に特徴的でした。今後、複数の資料館を維持していく中で、こうした形態は好事例になるのではないかと思います。

それと同時に、各資料館に保存されている資料については、現在、ロシアとの交流が途絶えており、新しいコンテンツが生まれにくい状況です。その結果、古いコンテンツが徐々に劣化している実情を目の当たりにしました。この点については、何らかの形で良い状態のまま残せる方策を検討していく必要があると感じています。

羅臼では、実際の元島民の方のお話をデジタルで視聴できる機会がありました。こうした取組によって、より多くの方々に直接的に伝わるとの印象を持ちました。

以上です。

○矢ヶ崎座長 楓構成員ありがとうございました。佐々木構成員お願いいたします。

○佐々木構成員 この度は2日間、地域の方々に丁寧に御案内・御説明いただき、誠にありがとうございました。

私自身、1997年頃まで網走に住んでおり、以前にも何度か足を運んだことはあったのですが、今回は久しぶりの訪問で、改めて多くのことを感じる機会となりました。

特に印象的だったのは、担当の方が直接語ってくださることで得られる理解と、単に展示パネルを読むだけの理解とでは、深さが異なるということです。私は博物館をフィールドとしていることもあり、「人が語る」という行為の意義を改めて強く感じました。もちろん、それを常に提供できるかどうかは別の課題ですが、大切な要素であることは間違いありません。

もう一点申し上げたいのは、それぞれの施設が、どのようなメッセージを発しているのかという点です。仮にコンテンツが同じであっても、その伝え方や意図は異なります。そうしたメッセージの違いや方向性について、一度全体で整理し、体系化していくような作業が必要ではないかと感じました。

今回の見学を通じて、今後の議論にいかせる多くの情報や資産を得ることができたと思っております。改めて、感謝申し上げます。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。本間構成員お願いいたします。

○本間構成員 先日は、2日間にわたり多くの施設を見学させていただき、地域の方々や説明して下さるの方々から熱意あるお話を伺い、非常に実感をもって状況を理解することができました。

他の委員の方もおっしゃっていましたが、やはり「説明してくれる人がいること」と「展示を見ること」の間には大きな差があります。今回の視察では、事前にバスの中で『ジョバンニの島』という映画を鑑賞し、その後に展示施設を見学させていただいたこと、また翌日には『標津物語』を観たことも含めて、一連の流れの中で学びを深められたと感じています。

修学旅行で訪れる方々についてもお話を伺いましたが、展示を見る前後や、その周辺での学びの機会まで含めて考えると、更に可能性が広がるのではないかと感じました。いくつかの施設のウェブサイトも拝見しましたが、もう少し工夫や改善ができる余地があるのではと思っています。

展示についても、各施設に貴重な資料が数多くある一方で、役割分担のようなものももっと明確になるとよいと感じました。例えば、ニ・ホ・ロでは総合的に展示されていましたが、他の施設では似たような資料でも、それぞれ異なるメッセージを発信していました。そうした点を整理・調整することで、来訪者にとってより有益な体験となるのではないのでしょうか。

最後に、展示の評価という観点についても申し上げます。熱意を持って来館される方が多い一方で、記録や感想を残さない方も一定数おられます。そうした方々がどのような視点で展示を見ているのか知る手がかりが少ないと感じました。中高生による壁新聞の内容などは一部拝見しましたが、今後はそうした成果や反応を通じて、来館者の理解の深まりをもう少し可視化できるような仕組みがあると良いのではないかと考えています。

○矢ヶ崎座長 それでは、渡邊構成員からも一言お願いできますでしょうか。

○渡邊構成員 私は明日視察に何う予定ですが、昨年、北方領土館やサーモン科学館には訪問させていただきました。その際にも感じたことですが、施設のリニューアルに当たって、デジタルコンテンツを導入した場合、すぐに陳腐化してしまうという課題があります。

技術的な観点になりますが、例えばリモートで常時アップデートできる仕組みや、インターネット上で多くの方がコンテンツに参加できるような仕掛けをつくることで、来館者が一度訪れた後も「関係人口」として関わり続けられるようになるのではないのでしょうか。

例えば、「自分が送ったメッセージがいつまでも展示されている」とか、「展示館の様子をリモートで常に見ることができるといった仕組みがあると、「また行ってみよう」と思えるきっかけになります。そうした仕組みによって、日本中、さらには世界中の人々が間接的に施設とつながりを持つようなビジョンも描けるのではないかと考えます。

この点については、明日の視察の中でも改めて確認してこようと思っております。明日以降もどうぞよろしく願いいたします。

○矢ヶ崎座長 この度は、私も視察に参加させていただき、本当に丁寧に御対応いただきましたこと、心より感謝申し上げます。先ほど委員の皆さまからも様々な感想が出ていましたが、私自身も、各施設には一つ一つ本当に多くの「宝物」があると感じました。それらをどう全体として見せていくのか、そして各施設の個性をどう打ち出していくのが大事だと改めて思いました。

北方領土の「見え方」や「角度」は、各施設によって異なります。どの島が見えるか、どういう視点で語られているかによって、伝わる印象も違ってきます。その一方で、全体として発信すべき共通のメッセージもあります。そうした要素を整理・統合しながら進めていけたらよいのではないかと思いました。

何度か訪れたことのある施設もありましたが、今回は御案内いただいたおかげで、改めて知ることや驚きがたくさんありました。例えば、海底電信線が島とつながっており、かつては実際に使っていたという話にはとても驚かされました。できれば、訪れる度に一つか二つはこうした新しい発見がある、そういう展示があると、来館者にとっても楽しい体験になるのではないかと思います。

今回の現地視察で得られた知見を、今後の議論にしっかりといかしていきたいと思っております。ありがとうございました。

では、次の議題に移ってまいりたいと思います。ここからは議題2のヒアリングでございます。北方領土返還要求運動や北方領土問題の啓発活動の取組をテーマに、お話を伺ってまいりたいと思います。得能さん、それから本見さん、半田さんから順にお話しいただきたいと思います。それぞれ10分程度でお願いできればと思います。まず色丹島御出身の得能宏さん、どうぞお話をお願いいたします。

○得能 宏 氏 本日はどうもありがとうございます。よろしくお願いいたします。

御紹介いただきましたとおり、私は元島民で、色丹島出身の得能宏と申します。今回は戦後80年という、私にとっては非常に厳しい年代に差し掛かったという思いで、本日もこの会議に参加させていただいております。

私は1934年、昭和9年の2月14日に、色丹島の斜古丹という地区で生まれました。北方四島の中では、歯舞群島に次いで色丹島が位置しており、その色丹島の中でも、斜古丹は特に中心的な集落でした。大きな本営漁業基地もあり、大手の漁船漁業や沿岸漁業を中心に栄えていた地域です。

戦後、日本の皆さんが北方四島を訪問する際には、色丹島の斜古丹や穴澗といった地区が主に紹介されてきました。しかし、令和元年を最後に、元島民を中心に続けてきた訪問は途絶え、現在で6年目を迎えております。

私は先ほども申し上げましたように、1934年（昭和9年）の2月14日、今でいうバレンタインデーに生まれました。現在91歳になります。今お話ししたように、北方四島への訪問が途絶えてから6年目に入っています。元島民としては、非常に厳しい現実を迎えていると感じています。長年にわたり、政府間の交渉とは別に、元島民と現地住民との間で交流が行われてきました。これは、私自身の体験からも言えることですが、政治的な交渉とは異なる形で、日本の元島民の気持ちを、今ロシアに住む方々に理解してもらうことができた非常に貴重な機会でした。

この交流は、元島民の思いだけでなく、全国各地から訪問された方々がそれぞれの立場で現地に思いを伝えたことによって築かれてきたものです。今そこに住むロシア人の人々とのつながりを生み出してきてきたのは、まさにこの「交流の力」だと、私は強く感じています。

私は先ほど申し上げたように、この6年間、訪問が途絶えている中においても、かつて島で深い関係を築いた、いわば私にとって親子のようなつながりを持つロシア人島民との交流は、細々とではありますが続けております。直接の連絡は取れませんが、サハリン在住のロシア人を介して、年に2～3回ほど言葉のやり取りを続けてきました。

「また来てほしい」「また行きたい」といった互いの気持ちを伝え合う、その言葉の交流が、私の心を支えてくれています。そして今、91歳という自分の年齢を見つめながらも、どうしてももう一度、故郷である色丹島の地を踏みたいという強い思いを胸に、語り部としての活動を続けております。

講演の回数は、これまでに300回を超えるほどになりました。東北から沖縄まで、全国各地の皆さんからお声がけいただき、訪問しています。元島民としての歴史、そしてその中で経験した苦しみや悲しみ、さらに、これからの北方四島の運命について、今そこに住んでいるロシアの人々との交流を通じて感じたことなどもお話ししています。

私は現在、根室市の花咲港の近くに住んでおりますが、そこには北方四島からのロシアの貿易船が、海を進んでほぼ毎日のように入港しています。こうした経済的なつながりが現実としてある一方で、国と国との関係には大きな矛盾があるのも事実です。

それでも私たちは、こうした現実を受け止めながら、再び故郷である色丹島、そして択捉島、国後島、歯舞群島に渡れる日が来ることを信じ、願っています。

そんな中、元島民の平均年齢は既に89歳に達し、私も現在91歳ですが、皆さんのお力をいただきながら「まだまだ頑張れる」と思い、今日もこの席に参加させていただいております。皆さんの温かい御理解と、日本国としての確固たる立場からの思いを、私は帰ってから多くの島民仲間に伝えることができると感じています。

中でも私が一番心強く思っているのは、後継者の存在です。三世・四世の若い方々、特に高校生たちが、元島民に代わって全国を巡り、北方領土返還運動を支えてくれています。例えば、地元の根室高校出身で現在大学生の若者たちが、全国でこの運動に取り組んでいるのです。その姿には非常に大きな力を感じますし、彼らの活動が全国で育てあげられ、共有されていくことを強く願っています。

北方四島が日本の領土であるという事実は、揺るぎのない普遍的なものです。私はそのことを後継者たちに託したいと思っています。そして全国的な運動として、北方領土の返還を求める声が更に広がっていくことに、非常に大きな希望を感じています。

私自身は91歳ですが、まだできる限り、自分に課せられた役割を果たしていきたいと考えています。この運動を通じて、自分が担ってきた思いを次の世代にしっかりと引き継いでいく、そのために、今日も皆さんの中に混じり、皆さんから力をいただけて帰りたいと願っております。

今、元島民の数は4,000人台となり、年々減少しています。先ほども紹介がありましたが、元島民の年齢は現在90歳近くに達しています。そのことを考えると、私自身、「これが最後のつもりで臨もう」という覚悟で日々を過ごしています。だからこそ、皆さんのお力添えを心からお願いしたいと思っています。

これは決して私個人や元島民だけの話ではありません。北方領土の問題は、まさに日本国民全体の問題であり、全国の皆さん一人一人が自分自身のこととして、より深く思いを巡らせていただければと、切に願っております。

○矢ヶ崎座長 本日は大変ありがとうございました。どの御発言も非常に重く、しっかりと受け止めなければならぬという思いで拝聴しておりました。

特に最後におっしゃられた「これは日本全体の問題なのだ」というお言葉が強く印象に残りました。まさにそのとおりであり、私たち自身もその視点に立って、しっかりと考えていかなければならないと感じました。

元島民の皆様の平均年齢が89歳に達している中で、得能様からは「これからも頑張る」という若々しく心強いお言葉をいただきました。また、お隣に座られていた継承者の方々についても、心強い存在であるとのメッセージをいただきました。ありがとうございます。

それでは続きまして、千島歯舞諸島居住者連盟羅臼支部副支部長であり、後継者の会事務局長でもいらっしゃる本見泰敬さんに御発言をお願いしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○本見 泰敬 氏 よろしく願いいたします。

ただいま御紹介にあずかりました、千島連盟羅臼支部・後継者の会で事務局長をしております本見と申します。父が国後島出身で、私はその後継者二世になります。

今回は「千島連盟における後継者育成の取組」というテーマをいただいておりますので、資料を用意してまいりました。お手元に資料2が配られているかと思っておりますので、それに沿ってお話しさせていただきます。よろしく願いいたします。それでは、1ページをめくってください。

まず、「後継者」と一口に言っても、いろいろな組織がありますので、その点を前提として少し御説明させてください。千島連盟は、元島民とその関係者で構成されている団体で、全国に15の支部があります。それぞれの支部に「後継者の会」や「青年部」などの名称で後継者組織が存在しています。下の方に、根室から富山まで、支部名を括弧書きで記載しています。

その中で、「根室管内後継者連絡協議会」という組織があります。資料では黄色で塗りつぶしている部分、つまり根室・別海・中標津・標津・羅臼という「一市四町」によって構成されているもので、根室管内に特化した後継者のネットワークとして、様々な事業を行っています。

さらに、札幌にある千島連盟本部では、「後継者活動委員会」と「後継者活動推進」が設置されていて、全国各地の支部にそれぞれ担当者が配置されています。年間の事業計画や企画は、それぞれの組織で担っている形です。

後継者の現状についても少し数字を基に御紹介します。今年3月末の時点で、千島連盟に登録されている後継者会員数は、二世・三世・四世を合わせて1,744人です。ただし、同じく資料にあるとおり、二世だけでも16,325人、推計では全体で約29,398人が後継者に該当するだろうとされています。これらの数は、北海道大学の橋本先生が様々な資料を基に算出されたものです。

その中で、実際に会員登録をしてくださっているのは先ほどの1,744人というわけですが、さらにその中で、私たちのように啓発活動や語り部として実際に動いている後継者となると、おそらく100人いるかないかという状況です。いろいろな事業を行ってはいますが、毎回顔ぶれがほとんど変わらず、参加できていない方も多し。皆さんいろいろな事情があるとは思いますが、現状としてはそうした課題があります。

次のページをお願いします。こちらには、後継者事業として本部で年間にどれくらいの事業を行っているかを記載しています。おおよそ年間8本程度で、5月から始まり、3月までに様々な取組があります。最初は「北方領土現地青年の集い」で、その後も毎月いくつかの企画があります。右側には昨年度の参加者数を記載しています。会員数が1,744人いても、各事業には定員があるため全員が出られるわけではありません。ただ、それでも実際に参加している人数を見ていただければと思います。

とはいえ、やはりここでも参加者の顔ぶれがほとんど固定されているというのが実情です。ですが、その固定された顔ぶれの方々、非常に熱心に活動してくださっている方で、本当に頭が下がります。

その他、先ほど得能さんからもお話があったように、後継者による語り部活動も行っております。全国に派遣されたり、地元では修学旅行で本州から来る学生に語り部を行ったりしています。語り部になってもらうための講習会を各地域で開催したり、支部ごとの啓発活動として署名活動や、中には「北方領土クイズ大会」を実施したりしている支部もあります。

次のページをお願いいたします。ここでは「後継者育成の課題と取組」について書かせていただいています。例えば、今日は四世の半田さんも来てくださっていますが、三世・四世、つまり私たち二世の次の世代にどうやって参加してもらうかというのが、今まさに大きな課題です。会員として入ってほしい、一緒に活動してほしいという思いはあるのですが、なかなか人数が増えていかない。

理由を聞いてみると、「活動に対する理解がない」「そもそも興味がない」といった反応が返ってきます。これに対しては、やはり一人一人に個別で声をかけ、理解してもらう努力をしています。後継者といっても年齢層が幅広く、同年代から声をかけてもらうことも大切だと感じています。

実は私も、18歳で就職した年に、元島民の方から「後継者として返還運動をやってほしい」と誘われました。当時のメンバーは50代、60代の方ばかりで、最初は正直とてもつらかった。今の若い人もきっと同じ気持ちになると思うので、今はできるだけ同年代から声をかけるようにしています。

次に「若い世代の事業参加」ですが、様々な事業を考えて実施しているものの、なかなか参加に繋がりません。やはり皆さん、休日は家族と過ごしたいとか、自分の時間を優先したいという思いもあると思いますし、現役世代は仕事を休めないという事情もあります。

だからこそ、事業の計画段階で日程を工夫したり、「まずは一回試しに来てみませんか？」と声をかけたりするなど、参加のきっかけづくりを意識しています。また、参加するだけで終わらないように、主体的に取り組めるようなプログラムをつくろうと模索しています。

三つ目の課題は「語り部の育成」です。これは本当に難しいです。得能さんのように積極的に活動されている方もいますが、羅臼でも昨年、語り部を務めていた元島民の方が「もう続けられない」と引退されました。映像で記録を残す取組も行っていますが、やはり生の声に勝るものはありません。

だからこそ、私たち後継者がそれを引き継いでいかなければと思っています。語り部といっても30分から1時間話すのは負担が大きいので、まずは10～15分の「ミニ語り部」から始めるとか、トライアルや研修会を実施して、誰かの語りを見て学ぶような場をつくっているところです。

最後のページをお願いいたします。現在取り組んでいる新たなチャレンジとしては、若い世代への「きっかけづくり」があります。例えば、北海道出身のお笑いコンビ「アップダウン」の方々にお願

いして、北方領土をテーマにした漫才を作ってもらい、講演してもらっています。そうした形で、ちょっとでも関心を持つきっかけになればと思っています。

また、昨年からは、若手だけで国会議員への要請活動にも取り組んでいます。さらに、今後のチャレンジとして、語り部の代替案として「朗読劇」にも挑戦してみようと考えています。アップダウンの漫才の中に朗読劇の要素がありまして、それを参考に、講師としてお招きして実際に朗読劇の企画を立てているところです。

こういった取組を通して、なんとか後継者を増やし、育てていきたいと考えています。時間も限られておりますので、私からは以上とさせていただきます。ありがとうございました。

○矢ヶ崎座長 最後のページ、新たな取組なども大変チャレンジングで、興味深いものがあったと思います。本見さんありがとうございました。では続きまして、元根室高校北方領土根室研究会会長でいらっしゃいまして、元島民四世の半田つくしさんからお話をお願いいたします。よろしく願いいたします。

○半田 つくし 氏 皆さんこんにちは。先ほど御紹介いただきました、半田つくしと申します。今日は私がこれまで取り組んできた北方領土に関する活動について、10分という限られた時間ではありますが、お話しさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

まず簡単に自己紹介させていただきます。私は現在札幌の大学に通っていますが、出身は根室市で、高校生のときには北方領土根室研究会（以下「北方研」という。）の会長として活動していました。私自身は択捉島の四世で、曾祖母がかつて島で生活していたそうです。

私が北方領土問題に初めて触れたのは中学1年生のときでした。元島民の方のお話を聞く機会があり、それがきっかけでこの問題に興味を持ちました。ただ、そのときは自分が島民四世であるということも知らず、実際にその事実を知ったのは高校3年生の卒業間際でした。家族の中でもあまり明確に語られていなかったようで、しかも私が幼いころに曾祖母が亡くなってしまったため、直接話を聞くことはできませんでした。

そういう状況もあって、中学生のころは北方領土に関する知識もあまりなかったのですが、初めて聞いた元島民の方のお話の中で、「日本人とロシア人がかつて一緒に生活していた時期があった」と知って、大きな衝撃を受けました。「なぜ北方領土は今も返還されないのか」という疑問が強く心に残り、それが関心を深めるきっかけになりました。

それ以降、元島民の話を聞いて感想文を書いたり、北方領土問題をテーマにした弁論発表をしたり、署名活動などの啓発運動に参加したりしてきました。また、当時の北方研の会長のお話を聞く機会もあり、ビザなし交流での経験や、日々の部活動の様子などを知って、私ももっと深く関わってみたいと感じるようになりました。

そうした思いから、地元の根室高校に進学し、北方研に入会しました。北方研は、もともとは地理研究部として活動していたのですが、顧問の先生の退職により一度廃部となり、2003年に北方領土根室研究会として復活した部活動です。

北方研の活動は多岐にわたっていて、中高生や一般の方々向けに出前講座を行ったり、道内外の様々な地域の方々と意見交換をしたりしました。元島民のお話を聞きながらラジオ収録をしたり、地元のFMラジオで活動報告をしたり、地元イベントでの署名活動にも積極的に参加しました。署名活動では多くの方と直接話をすることができ、それぞれが抱く北方領土への思いや考えを聞く貴重な機会となりました。

ほかにも、島民二世・三世・四世を対象にした後継者研修会に参加したり、国会議員の方々との懇親会に出席したり、啓発次世代ラボに参加したことも、今回この場でお話しさせていただききっかけとなりました。若い世代に関心を持ってもらうにはどうしたらいいかというテーマで、たくさん考える時間をもらいました。また、ドキュメンタリー番組にも出演するなど、様々な経験をさせていただきました。

北方研の活動の中では、コロナ禍やウクライナ侵攻前まで、ビザなし交流に参加して、北方四島に住んでいるロシア人の青少年と交流するという取組もありました。

こうした中高時代の経験を通して、私はいろんな気付きと学びを得ることができました。まず、北方領土から遠く離れた地域にも、この問題に関心を持って活動している方がたくさんいるということに驚きました。その一方で、「北方領土について何も知らない」という人も非常に多く、地域によって関心や情報の格差があることも実感しました。

特に、北海道や根室から離れた地域では、地理的な距離がある分、活動の場に限界があると感じることが多かったです。講座を聞いてくださった方々の中には、「活動したいけど、どこで何をすればいいかわからない」と話す方も多くいました。だからこそ、もっと全国に活動の輪を広げていく必要があるのではないかと思います。

根室市で活動する中で、地域の皆さんが北方領土問題に強い思いを持ち、一体となって取り組んでいる姿には本当に胸を打たれました。実は、私はもともと大学に進学したらそのまま根室を離れて暮らすつもりでした。でも、こうした活動を通して、根室やその周辺地域の魅力を再発見し、地元の人たちの結束の強さを目の当たりにしたことで、大学卒業後は根室に戻り、北方領土問題の解決のために地域に貢献したいという気持ちが芽生えました。

現在は大学進学のため札幌で暮らしていますが、これまで築いてきたつながりのおかげで、語り部活動を続けたり、学生との交流会や後継者研修会などに参加したりと、様々な形で活動を続けることができている。ただ、根室にいたときよりも活動の機会は少なく、大学の授業と重なって参加できないことも多いのが現状です。

それでも、これまで一緒に活動してきた先輩方や、北海道外でもそれぞれ頑張っている仲間たちの存在は大きな励みになっています。離れた場所にいても、それぞれのやり方でこの問題に向き合っている人がいるとわかっているからこそ、私も今の自分にできる形で啓発活動に関わり続けたいと思っています。

今後については、まず地元・根室で参加できる活動には積極的に参加していきたいと考えていますし、札幌で行われる活動にもできる限り参加していきたいです。札幌にも同じように後継者として活動している仲間がたくさんいますので、協力しながら、札幌からも情報発信できる方法を模索していきたいと思っています。

個人としても、身近な人たちに北方領土問題について伝えていく努力を続け、少しでも関心の輪を広げていけたらと思います。私は北方研に入った当初、自分が四世であることも知らず、またコロナ禍だったこともあり、一度も北方四島に渡ったことがありません。ロシア人とも交流をしたことがないのですが、近い将来、曾祖母が生活していた択捉島をはじめとする北方四島がどんな場所だったのか、自分の目で見てみたいという思いがあります。

そのためにも、一日も早く北方領土が返還されることを願っていますし、私自身も今後もこの問題について考え続け、行動していきたいと思っています。

以上です。御清聴ありがとうございました。

○矢ヶ崎座長 どうもありがとうございました。半田さん、本当に素晴らしいお話を聞かせていただきました。活動もきっと大変だと思いますが、その中で「仲間がいるから」「先輩がいるから」という言葉がとても印象に残りました。やはり、そうしたつながりが支えになっているのだなと感じました。大切なことだと思います。

お三方には、改めて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

それでは、ただいまのお話について、何かお聞きになりたいことがありましたら、このあと少しだけ質疑のお時間を取りたいと思います。あまり堅苦しい形ではなく、自由に御質問をいただければと思います。どなたからでもどうぞ。

○渡邊構成員 半田さんのお話、とても感動しました。ありがとうございました。部活動として活動を続けてこられたとのことですが、現在の後輩の皆さんはどのような状況なのでしょう？

○半田 つくし 氏 活動の状況としては、後輩たちも私たちが取り組んでいた頃と同じような活動を続けてくれています。ただ、私が高校3年生だった当時、後輩の人数がとても少なく、今も私が知っている限りでは、当時の後輩のうち活動を続けているのは1人だけです。それでも、その後輩が一生懸命活動を続けてくれていて、本当にありがたく思っています。

○渡邊構成員 それは本当に嬉しいことですね。参加してくる生徒さんたちは、何が一番の動機になっているのでしょうか。

○半田 つくし 氏 私たちの講座を聞いてくださる方々のことですよね。そうですね、ほとんどの方は、やはり学習の一環として来られることが多いです。例えば、修学旅行で根室などの隣接地域を訪れる学校の生徒さんたちに対して行う講座が主になります。その際に、学校の授業の一部として私たちの話を聞いてくださるという形が多く、そうした方々に向けて、少しでも北方領土のことを知ってもらおうという思いで活動していました。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。本間構成員お願いします。

○本間構成員 私も半田さんに少しお聞きしたいのですが、根室高校の部活動に入っている高校生の皆さんというのは、やはり三世や四世といった、島にゆかりのある方が多いのでしょうか。世代的には、あまり関心を持っていないという若い人も多い中で、実際どうなのか伺えればと思います。

○半田 つくし 氏 そうですね。会員の中でも、三世・四世にあたる子たちのほうが比較的多いと思います。多くは、中学生の頃から弁論大会に参加していたような子たちが、その延長で北方研に入ってくれている印象です。

ただ、私自身が北方研に入ったときは、まだ自分が後継者だということを知らなかったんです。私は単純に北方領土に興味があって入会したタイプでした。だからきっと、私のように四世ではなくても、根室に住んでいるからこそ北方領土問題について考えたいと思って入ってくれる生徒もいると思います。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。では楓構成員お願いいたします。

○楓構成員 本見事務局長にお伺いします。

半田さんのような方が活躍していただければ、本当に心強いと感じますが、やはり、元島民の三世・四世の方々が実際に活動に参加されるのは、ハードルが高いというのが現実のようですね。

実際にそういった方々と直接お話をされたとき、表向きの理由とは別に、「なかなか活動しにくい」と感じられる本音の部分では、どのような意識や思いを抱いておられるのか、もし差し支えなければ教えていただけますか。

○本見 泰敬 氏 「参加してくれない本音」という点ですが、やはり一番大きいのは、たとえ後継者であっても「興味がない」ということなんじゃないかと思います。

それから、少し言葉の選び方が難しいのですが、「会員になってしまうと面倒なことが起こるんじゃないか」という気持ちもあるように感じています。これは、私が実際に声をかけたけれど仲間になってくれなかった方々の、本音に近いところなのかなと思っています。

ですので、どうかしてうまくきっかけをつくって、一緒に活動していけるような雰囲気を作れたらと考えていて、今も新しい事業などをいろいろ模索しているのですが、現実としてはやはり簡単なことではない、というのが正直なところですよ。

○矢ヶ崎座長 佐々木構成員、どうぞ。

○佐々木構成員 得能さんにお伺いしたいのですが、二世や四世の方々がそれぞれの立場でいろいろな思いを抱えていらっしゃるなかで、元島民として、今御自身にできることは何だとお考えでしょうか。もちろん、精神的な支えとしての役割は大きいと思います。

ただ、例えば先ほどの半田さんが「自分が四世であることを知らなかった」とおっしゃっていたことには、私も正直驚きました。また、本見さんからも、二世・三世であっても関心を持って参加してくれる方がなかなか少ないというお話がありました。

そうした現状を踏まえて、今、何ができるのか。とても難しい質問になってしまいましたが、もしお考えがあれば教えていただけますでしょうか。

○得能 宏 氏 今の御質問についてですが、これは私自身もよく自問自答することなんです。私は今では90歳を超えましたが、戦後に北方領土の返還運動が始まった当時のことをよく覚えています。

その運動の原点は、まさに「北方返還運動発祥の地」である根室にあります。戦後、ソ連の侵入直後に島を脱出した元島民たち、そしてその人々と共に歩んできた根室の市民、当時はまだ根室町でしたが、彼らが力を合わせて、ふるさとの返還を願う運動を立ち上げたのです。

けれども、現実には戻れなかった。本当に、戻ることは叶いませんでした。そしてその当時から既に、今御指摘いただいたように、たとえ根室に住んでいる人であっても、返還運動に対して全面的に支援する人と、そうでない人とがいました。そうした「色分け」が確かに存在していたのです。

そういう歴史の中で、私たちは今を迎えています。先ほどもお話ししましたが、私は11歳のときに島でソ連の侵攻に遭い、そこから3年間、現地でソ連と混住しました。そして3年後、ようやく根室に来ることができました。

その当時は、まだ返還運動が大きく動き出していたわけではありませんでした。しかし、年月が経つ中で徐々に、「北方領土は日本の領土だ」という認識が広がっていったのです。それは、単に根室や北海道だけの問題ではない、という理解に変わっていきました。先ほど申し上げたように、全国運動へと発展するだけでもかなりの年数がかかりました。

そして今、北方領土問題は、戦後の未解決の領土問題として、沖縄、小笠原、そして北方領土という三つのうち、唯一「戦後処理」が済んでいない領域として残されている状況です。戦後処理が今なお残されているのは、北方領土だけなんです。沖縄も小笠原も、かつては日本の領土でありながら一時的に失われましたが、現在はどちらも復帰しています。唯一、北方四島だけが未解決のまま残されているのです。

私はこの問題こそが、対ロシアとの間に横たわる、非常に難しい国際的な問題だと考えています。今のロシアの国際情勢を見ても、この問題が簡単に進展しないことは明らかです。相手がロシアであるというだけでも、国としての対応には慎重な配慮が求められます。

そうした中で、私たちは本音の思いを全国で訴え続けてきました。しかし、相手の心を打ち砕くような訴えをしても、この問題は並大抵の努力では解決しない。やはり長い年月が必要なのです。

ただ、私は考えていました。国と国との政治的な交渉には硬直した面がありますが、島にかつて住んでいた私たちと、今そこに暮らす人々との「交流」の中にこそ、解決の芽を見いだせるのではないかと。

私は令和元年までは、その確信を持っていました。しかしそれ以降、コロナ禍、そしてウクライナとロシアの戦争という出来事が起こり、島への上陸はさらに難しい問題となってしまいました。

そして今、交流が途絶えて6年目に入っています。それだけに私は、元島民一人ひとりが「どうしても生きているうちに帰りたい」という強い思いを持っているということ、是非知っていただきたいと思っています。

かつて約17,300人いた元島民も、今では5,000人を切ってしまいました。そして私のように、こうして皆さんの前で元島民としての心情をお話できるような健康とエネルギーを持った人間も、ずいぶん少なくなってきました。

私たちは、残されたこのエネルギーを最後の一滴まで使い果たす覚悟で、今も活動を続けています。そして、その願いはただ一つ、ここにいる後継者の皆さん、そして全国の皆さんが「原点の地」である根室に足を運んでくださることです。

私はこれが、今の日本にとって、そして日本国民にとって、何よりも大切なことだと思っています。東北からも、沖縄、九州、四国からも、全国の方々が根室を訪れ、ここを支えてくれる。この動きを絶対に止めてはならないのです。

もしこれが止まってしまうと、それは日本が北方領土を諦めたのだという、非常に大きな誤ったメッセージをロシア側に与えることになってしまいます。私はそれだけは、絶対に許してはならないと思っています。

元島民、そしてその後継者がこの地を守るというのはもちろんですが、何よりも北方領土は日本の領土であり、一度たりとも他国の領土になったことはありません。この事実を日本人全体がもう一度認識し直し、国家の問題として、決して譲らない姿勢を持ってもらいたいのです。

今回こうして皆さんの前で発言させていただけたこと、元島民の一人として大変光栄に思っています。そして、この場での皆さんの思いを胸に、私は根室に戻って仲間たちにしっかりと報告したいと思えます。

根室では様々な大会が開かれ、いろいろな場所から多くの励ましの言葉をいただいています。そのことが本当に心強いのです。そして今日もまた、91歳という年齢ではありますが、自分自身に「まだ若い、まだやれる」と暗示をかけ、ここに来ました。

この会場で得られた皆さんの熱意や雰囲気、私はしっかりと持ち帰り、伝えてまいります。北方領土の問題は、時間はかかるかもしれませんが、これは皆さん一人一人の問題でもあります。だからこそ、正々堂々、決して歩みを止めることなく、共に前に進んでいきたいと思っております。

私は今、ここにいる皆さん、そして後継者の皆さんの存在が、本当に力強く、元島民にとっては何よりも心強く感じられます。後継者としてこの問題に関わってくださること、非常にありがたく思っております。

特に高校生の皆さん方の取組には、私は大きな感動を覚えています。以前、私が語り部として京都や九州に行った際も、高校生の方々が一緒に来てくれて、元島民の思いとともに「私たちもこう考えています」と、自分たちの言葉で発表してくれました。こうした姿を見て、元島民は本当に力をもらえるのです。

今日のこの会場にいらっしゃる皆さんにも、きっとその思いは伝わっていると信じています。そして、これからも私たち元島民とともに歩みを止めることなく、それぞれの立場で役割を果たしながら、進んでいっていただきたいと思っています。

私自身も、皆さんから今日また新たに力をいただきました。本当に感謝しております。うまくお答えになっているかわかりませんが、私からの一つの決意として受け取っていただければ幸いです。

○佐々木構成員 まさに、そのような意志の強さこそが皆さんを支えているのだと、改めてよく伝わってきました。ありがとうございます。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。得能さんからは、むしろ私たちの方がエネルギーと志をいただいたように感じております。本当にありがとうございました。

やはり、今後はこの根室をはじめとした隣接地域に、全国からより多くの方々に足を運んでいただくことが重要だと思っています。そして、実際に現地で触れ合えていただく機会をどう作っていくか。それが今後、展示施設の在り方や改善を進めていく中で、私たちに課せられた大きな課題でもあると感じています。

本日は、お三方には貴重なお時間を割いていただき、素晴らしいお話を聞かせていただきました。改めて心より感謝申し上げます。得能さん、本見さん、半田さんにおかれましては、これにて御退席いただいて結構です。本日は誠にありがとうございました。

○得能 宏 氏 最後にもう一つ、お話ししたいことがあります。現在、島に住んでいるロシア人の方々は、決して交流を拒んでいるわけではなく、むしろ交流したいという思いを持っていると感じています。それはやはり彼らの中にも複雑な感情や事情が混在しており、日本人と交流する中で「なぜ日本人がここに来るのか」という疑問を抱いているからだと思うのです。

この「なぜ来るのか」という問いこそが、彼らにとって非常に大きなインパクトを与えていると思うんですね。なぜならそれを考えることによって、必ず歴史に立ち返ることになります。私は、今島に住んでいるロシア人の方々にも、そうした交流を通じて歴史を学んでもらうことが不可欠だと思っています。

余計なことかもしれませんが、元島民としてどうしても皆さんにお伝えしたく、この思いを発言させていただきました。ありがとうございました。

○矢ヶ崎座長 いえいえ、大変ありがとうございました。改めてお三方には、心より感謝申し上げます。どうぞ、席をお移りください。

それでは、次の議事に進みたいと思います。続いては、「北海道の観光の取組」をテーマに、清野さん、長野さんの順に御説明をいただきます。

それではまず、国土交通省北海道運輸局観光部次長の清野信也さん、御準備はいかがでしょう。どうぞよろしく願いいたします。

○清野 信也 氏 皆さん、いつも大変お世話になっております。御紹介にあずかりました、国土交通省北海道運輸局観光部の次長を務めております、清野と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

早速お話に入らせていただきます。今回のテーマは「道東地域の観光客誘致策および観光データ」ということでしたが、当局は北海道全域を所管し、主にインバウンドを中心とした施策を展開しており、道東に特化したデータや施策というものは多くありません。そのため、具体的な地域別データ等については、後ほど御説明のある北海道観光機構さんにお任せし、私は別の視点からお話をさせていただきます。

限られた10分という中で何をお伝えすべきか迷いましたが、今回は各地域の方々が御参加されているということもあり、現在我々が注力している「観光地域づくり」について、基本的な考え方をお話できればと思います。

1 ページ目の資料を御覧ください。もう既に皆さん御存じかとは思いますが、コロナ明け以降の訪日外国人旅行者の需要回復は非常に順調で、昨年度は国全体で過去最高の約3,700万人を記録しました。今年に入ってから、全ての月で前年を上回るペースで推移しています。

ただし、その7割が、いわゆる三大都市圏、東京、大阪、京都周辺に集中しているという状況です。それをどうやって北海道を含む地方に分散させていくのか、というのが大きな課題になっています。

くわえて、北海道内でも同じような現象が見られておりまして、札幌を中心とする道央圏に、インバウンドや国内観光客の約7割が集中しているというデータがあります。今後、それをどうやって地方へと周遊させていくか、これはコロナ禍前からずっと続いている課題です。

こうした現状を踏まえて、国の観光に関する基本計画の中では、「観光地域づくり法人 (Destination Management/Marketing Organization、以下「DMO」という。)」を中心として、観光客の各地域への広域周遊を促進していくことが目標として掲げられています。

今御覧いただいているスライドは、DMOについて説明する際によく使われるものです。今日お集まりの皆さまの中には、「DMO」という言葉があまり聞き慣れないという方もいらっしゃるかもしれませんが、簡単に言うと、地域観光の司令塔として、観光を手段にして持続可能な地域づくりを進めていくための法人、そんなイメージで捉えていただければと思います。

DMOに必要とされている要素は、スライドの上の方で赤く表示してある箇所です。具体的には、「地域の多様な関係者の巻き込み」と「科学的なアプローチ」です。私たち北海道運輸局でも、最近では特にこの2点に力を入れて、地域の方々にお話をさせていただいております。

次のページを御覧ください。先ほど触れた「地域の多様な関係者の巻き込み」というのを、もう少し難しい言葉で言い換えると、「観光によって地域にもたらされる波及効果を可視化し、それを地域の方にきちんと伝えていくことに加え、域内調達など地域内にお金が落ちるシステム構築するとともに、地域の社会経済や伝統・文化、観光資源、自然環境などを適切に管理・運用していくこと」だと考えており、我々はこれを「エリアマネジメント」や「地域マネジメント」といっております。

これを進めていくための基本的な考え方や、地域が自分たちの立ち位置を客観的にチェックする際の指標となるのが、観光庁が作成した「日本版持続可能な観光ガイドライン (JSTS-D)」と言われるものとなります。

このガイドラインは、観光庁のホームページで閲覧できますので、お時間のあるときにでも是非一度御覧いただければと思います。

持続可能な観光について、どのような指標が設定されているのか、何を目指すべきなのか、具体的に記載されていますので、きっと参考になると思います。

続いて、「科学的アプローチ」について説明します。これは、「内外環境の調査、つまりデータ分析をベースにし、来訪者の属性をきちんと分類し、そこからターゲットを絞り込んで、プロモーションやその他の戦略を立て、具体的な成果指標を設定する」ことで、先ほどの「多様な関係者」の目線を一致させて取組を進めるといったこととなり、私たち北海道運輸局では、これを「デスティネーション・マーケティング」と呼び、昨年からのいろいろな地域で進めてきています。

観光庁の方でも、「観光地経営戦略」といった名称で、DMOにはこの戦略策定を義務づける方向で位置づけしています。

このマーケティングに関してもう少し踏み込んでお話しすると、例えば情報発信をする際、相手にきちんと伝わるものでなければ意味がありません。そのためには、来訪者がなぜその地域を訪れたのか、どんな媒体から情報を得ているのかなど、心理的・行動的な属性も含めて分析する必要があります。

更に言えば、既に地域で展開されているアドベンチャーツーリズムや、昨年話題になったガストロノミーツーリズムなど、既存のコンテンツやツーリズムと、皆さんがこれから観光として発展させていきたいと考えている取組が、ちゃんと噛み合うかどうか、そこも含めて、戦略を立てていくことが重要です。

この後、御登壇される北海道観光機構さんからは、地域ごとの詳細な観光データを御紹介いただける予定ですので、そういったデータを活用しながら、地域の観光関係者と一体となって戦略を練っていく。それがこれからの観光地づくりに必要な視点ではないかと思っています。

次のページをお願いします。こちらの資料ですが、私たち北海道運輸局が3年ほど継続して取り組んでいる事業になります。観光庁における国内周遊促進を目的とした数少ない事業の一つです。

本日は詳細までは御説明しませんが、この事業は「日本の新たなレガシー形成事業」として、1,000年以上前に、一定の期間のみオホーツク海沿岸に栄えた「オホーツク文化」に焦点をあて、未来に継承すべき貴重な歴史遺産として、それらを面的に体感できる観光エリアを創出することを目指しております。

この事業のコンセプトは、史跡や遺跡からその土地の歴史や文化を学び、その土地特有の生活様式を知る、そして、今まさにそこに暮らしている人たちと出会うことで、その地域ならではの魅力を来訪者に伝えていければと考えております。

ただ、先ほどもお話に出たように、「興味がない」とか「関わりたくない」といった声があるのも事実です。例えば、オホーツク文化についても、その地域に住んでいる人たちの間でさえ、あまり知られていないという状況があります。今はごく一部の方々が「この地域には独自の文化があるんです」と発信してくれていますが、まずは地元の方々自身に、「この厳しい環境のオホーツク沿岸にも、古くから人が住み、文化を築いてきた」ということをきちんと知ってもらうことが大事だと思っています。私たちもそういう視点を持って事業を進めてきました。

本日御用意したのはこの3枚の資料ですが、これでお伝えしたかったことは大きく分けて3点あります。

まず一つ目は、「観光と連携して何かをやりたい」と考えるのであれば、地域の観光関係者としてしっかりと連携をとることが重要ということです。

現在、皆さんのエリアには、この地域を包括するDMOと呼ばれるような組織は存在しません。ただし、根室市、中標津町、標津町、別海町、羅臼町という一市四町には、「知床根室観光連盟」という組織があり、ここ数年、アドベンチャートラベルを中心に非常に精力的な活動しております。

この観光連盟には、各自治体の観光担当課や観光協会が参画していますので、そういった既存の関係者と連携していくことが、観光で何かを始める際の大前提になると思っています。そして、その組織が必ずしもDMOである必要はないと考えており、重要なのは、地域全体が一体となって取り組むことだと考えております。

次にお伝えしたいのは、「エリアマネジメント」の視点です。これは先ほども少し御紹介しましたが、北方領土に関わる施設や、それに関わる人々の「想い」や、これまでの歴史・文化といった地域資源を、どのように観光の中で活かし、同時に守っていくか。つまり、これらの要素を適切に管理・活用するということが、まずは地域として考えるべき基本ではないかと思っています。

その上で、「destination・マーケティング」の要素も踏まえつつ、地域のブランディング、つまり「この地域ならではの特性とは何か」ということをしっかり構築していく。その際に、例えば北方領土に関わる記憶や物語、風景といった資源を、来訪者に対してどう伝え、どう感じてもらうか、その目線を地域内で共有することが重要です。

オホーツク文化の取組のように、ある程度ストーリー性をもって継続的に取り組んでいくことが大切だと私たちは考えています。

そして、こうした取組を進めていく上で、観光庁としても相談の段階から使える、例えば「専門家派遣事業」というものがあります。これは全額国費負担で、専門家、例えば矢ヶ崎先生のような方を地域に呼んで、アドバイスを受たり、レクチャーをしてもらったりできる制度です。

そのほかにも、各種コンテンツの造成支援や受け入れ環境整備などに使えるメニューもいろいろと用意されておりますので、最初から大きな目標を立てようとせず、まずは「今、自分たちがどんな状況にあるのか」「何が地域の資源なのか」「どんな人たちに来てほしいのか」といったことを丁寧に考えた上で、必要な支援策を活用しながら、一歩ずつ進めていくのが現実的だと思っています。

本当はもっと具体的なお話をさせていただきたいと思っていたのですが、限られた時間の中で少し抽象的なお話になってしまったかもしれません。

ただ、何かあれば私たちも追加で御説明にうかがえますし、「こんなことを考えているけれど、どうすればいいか」といった御相談があれば、私たちにできる範囲でお手伝いさせていただければと思っています。どうぞお気軽にお声がけください。以上になります。

○矢ヶ崎座長 清野さん、どうもありがとうございました。続きまして、公益社団法人北海道観光機構事業企画本部プロモーション部担当部長の長野博樹さんからお話をお願いいたします。

○長野 博樹 氏 どうぞよろしくお願ひします。皆さんこんにちは。ただいま御紹介にあずかりました、北海道観光機構の長野博樹と申します。本日はこのような有識者会議に参加させていただくという貴重な機会をいただき、誠にありがとうございます。

私からも、先ほど御発表がありました北海道運輸局の清野次長に引き続いて、観光という側面から北方領土について少し着目しながらお話をさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、早速次のページに移っていただけますでしょうか。私ども北海道観光機構は、先ほど御紹介がありました通り、DMO（観光地域づくり法人）の一つです。北海道全体を所管する「広域連携DMO」という位置づけになります。私たちが取り組んでいるのは、北海道全体の観光に関するデータの収集とマーケティング、それから観光地づくり、そして北海道の魅力を発信するプロモーション活動も行っておりまして、国内外を問わず、現地でのPR活動や、最近ではメディアを活用したプロモーションなどにも力を入れています。

今回は、まず「北海道来訪者満足度調査」のデータを御紹介したいと思います。私たちの方で実施しているこの調査の中から、道東地域に関する満足度のデータを中心にお話しさせていただきます。資料の紙面が多いので、どんどん進めさせていただきますが、まずはこちらの図を御覧ください。これは道東エリアにおける満足度の調査結果です。具体的には、野付半島、別海町、中標津空港、そして根室、最後に釧路・釧路空港といった地域を対象にしていますが、今回の会議では特に、野付半島、別海、中標津空港、根室といった地域に焦点を当てて御説明してまいります。まずはこちらを御覧ください。性別のデータなのですけれども、見ていただくと、根室地区に来ている方は男性が圧倒的に多いというのが見て取れます。

次のデータに進みますと、誰と一緒に来ているかという調査です。これも非常に特徴的で、根室地区では「一人旅」の方が非常に多いという結果になっています。その次が「夫婦・パートナー」という順番ですね。

さらに次のページでは、年齢層についての情報です。こちらで特徴的なのは、男性はやはり50代以上が多く見られるのに対して、女性は比較的若い層の来訪が目立っているという点です。

続いて、旅行のきっかけについてですが、着地型の旅の中で、どんなきっかけで来ましたかという問いに対して、「休みがとれた」という理由もある一方で、「その他」と答えた方が非常に多いというのが、この地域特有の傾向になっています。我々としても分析が難しい「その他」が多いというのはちょっと特徴的です。これについては後ほど別途分析の結果を御紹介します。

そして、旅行中に何ををしたかという質問への回答では、根室地区では「自然・景勝地の観光・四季の体感」が圧倒的に多く、次に「温泉入浴」が続いています。「道の駅めぐり」なども挙げられていますが、やはりこの地域の自然に惹かれて訪れている方が多いということがうかがえます。

最後に、観光地を選んだ理由についても見てみますと、こちらもやはり「自然・風景」、「食べ物がおいしい」といった理由が主で、これらを目的に訪れている方が多いという傾向が見取れます。

それでは続けていきます。次のページでは最も重要視した訪問地の選択理由です。やはり「自然・風景」、そして「食べ物がおいしい」、さらに「温泉が楽しめる」が上位に来ています。これはやはり予想どおりといった感じですね。

続いて、道内旅行に対する期待度ですが、こちらも非常に高い数値が出ています。もちろん天候の変化や体調の問題などコントロールできない部分もありますが、全体として道東に来られる方々はかなりの期待を持って訪れているということがわかります。

次に、最も満足したことは何かというと、こちらもやはり景観、食事、温泉といったところが上位です。期待していたとおりの体験ができたということで、満足度は高いようですね。

さらに次のページを見ると、根室地域を訪れた方のほとんどが「また来たい」と感じているという結果が出ています。これはつまり、リピーター獲得の面でも非常に有利な地域であることがわかります。

続いて、来訪者の中で海外の方にも目を向けてみます。国交省や観光庁のデータでも示されているように、この地域を訪れる海外のお客様の多くは東アジアから来られている傾向があります。具体的には中国、韓国、台湾といった地域が上位ですね。これは昨年度のデータなので、今後変動の可能性もあると思います。

さらに、私たちの調査では、根室のような地域が「冬に強い」ということも見えてきています。北海道全体では夏の観光が主流ではありますが、海外からのお客様が増えている今、地域によっては冬に観光需要が高いところもあるということですね。

ここからは私たちが調査してまとめた、道東地域における観光の現状と課題についてです。まず現状ですが、一人旅や少人数の旅行が主流になっています。人気の地域としては、知床、根室、野付半島、別海、中標津などが挙げられます。特に若年層の女性や、50代以上の男性が多く訪れているのが特徴です。また、特産品のショッピングやアウトドア活動、とくにバードウォッチングやホエールウォッチングといった体験が浸透してきている印象です。訪問理由で「その他」と答えた人の中には、実は北方領土を見に来ている方が一定数いるのではないかと見ています。他にもこの地域ならではの目的として、鉄道やローカル線に乗ることを目的にしている方、お城好きやチャシ（砦）の見学、神社巡り、マンホールカードなど、特定のテーマを持って来訪されている方もいらっしゃるようです。また、60代や70代の方の中には、かつての「カニ族」「ミツバチ族」のような旅スタイルを復活させているような動きも見られます。

観光における課題としては、見るだけで完結してしまう観光コンテンツが多く、体験型の要素がまだまだ弱いということが挙げられます。今後はアドベンチャートラベルなど、より参加型・体験型のコンテンツに目を向けていく必要があると感じています。

また、若年層やインバウンド層への訴求力を高めることも重要です。これは北方領土に関心を持ってもらうためにも共通の課題かと思っています。

今後の展望としては少し尖った提案になるかもしれませんが、北方領土について物語性を持った体験型コンテンツとして再構築してみる、というのも一つの方向ではないかと思っています。例えば、アニメや映画、文学といったメディアを活用した観光戦略や誘導を考える必要があるかもしれません。具体的には、道東出身の作家やクリエイターと連携し、地域ブランディングを行うといった取組も期待できるでしょう。もちろん現時点で、北方領土に強い関心を持って来訪されている方がどれだけいるかは明確にはわかりませんが、実際に訪れることで関心を持つきっかけになる可能性は非常に高いと考えています。

続きまして、全国の教育旅行の現状について、簡単に御説明させていただきたいと思います。私の専門は教育旅行の誘致です。

根室地区で教育旅行をどう誘致していくかを考えるうえで、今、全国的に注目されているのが新学習指導要領の中にある「探究学習」です。特に高校では「総合的な探究の時間」という科目が設けられており、これが根室地域にとっては非常に強い訴求ポイントになると考えています。つまり、探究学習の素材として、この地域は非常に魅力的なんですね。

コロナ以降、教育旅行にはいろいろな課題が出てきましたが、その中でも全国的には誘致合戦が激化しています。そうした中で、この根室地域には圧倒的なアドバンテージがあると思っています。

少しページを飛ばして進めさせていただきますが、根室管内教育旅行誘致推進協議会さんのデータによると、昨年度は27校・3,207名の生徒さんがこの地域を訪れてくれました。この数字は非常に安定しており、根室地域には継続的に修学旅行が来ている傾向があります。

特に「北方領土を目で見る運動」が、修学旅行の一環として大きな存在感を示しているというのも事実です。そして今後、「探究」をテーマにしていく上でも、根室地域はその素材が本当に豊富です。どの角度からでも学びにつながる内容が揃っていて、非常に強みがあると感じています。

こういった素材をどう学校側に知ってもらうか、売り込んでいくかが重要で、ターゲットとしては、探究学習に力を入れていて、なおかつ旅費にあまり左右されない私立高校が最も現実的で効果的だと見ています。

簡単ではありますが、教育旅行という面から見ても、根室地域にはまだまだポテンシャルがあると改めて実感しています。今後も私たちとしては、この地域への誘客にしっかりと取り組んでいきたいと考えています。

長くなりましたが、御清聴ありがとうございました。

○矢ヶ崎座長 どうもありがとうございました。清野さん、長野さんには、全体的な概要から非常に具体的なポイントまで、幅広くご説明いただき感謝申し上げます。

それでは短い時間になりますが、ここで5分ほど質疑の時間を取りたいと思います。今の御説明に関して、御質問のある方はいらっしゃいますか？

はい、それでは佐々木構成員、お願いいたします。

○佐々木構成員 御説明ありがとうございました。

今の長野さんのパワーポイントの最後の方にあった、修学旅行における根室地域の特徴についてなんですが、令和6年度の実績で「27校・3,207名」とありましたよね。

これは、他の北海道内の市町と比べて、どの程度のポテンシャルを持っている数字なんでしょうか。

○長野 博樹 氏 実は昨年度のデータはまだ出ていないんですが、一昨年データで見ると、北海道に来た修学旅行、これは道内校は含まず、道外からの来道校が、だいたい約1,000校で16万人くらいという数字になっています。

さっき北海道運輸局の清野さんからもお話がありましたが、修学旅行もやっぱり札幌圏や千歳空港を中心としたものが大半を占めているのが現状です。

とはいえ、この根室地域はすごく健闘されているなと感じています。立地条件的に、飛行機の便数が少なかったり、宿泊施設のキャパシティが限られていたりという課題がある中で、一市四町で構成されている協議会の皆さんが本当に尽力されていて、27校・3,207名というのは、私の立場から見てもかなりすごい数字だと思います。

ただ、実際にはまだまだもっと伸びしろがあると思っていて、受け入れ体制がうまく整えば、さらに多くの修学旅行を呼び込めるのではないかなと。これは、私自身が現場で携わってきた中での率直な感想です。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。楓構成員どうぞ。

○楓構成員 清野さんに先ほどお話にあったレガシー形成事業についてお伺いします。

オホーツク文化圏周辺が主な対象エリアになっているとのことでしたが、この事業に関して、今後のこの会議に資料を提出していただくことは可能でしょうか。

また、知床根室観光協議会がこの事業にどのように関わって、どのような動きをされているのかについても、教えていただければと思います。

○矢ヶ崎座長 清野さん、すみません。

今の楓構成員の御質問に加えて、私からも1点伺いたいことがありますので、合わせて3点まとめてお答えいただければと思います。

レガシー形成事業に関連して、オホーツク文化圏のエリア図の件ですが、隣接地域について見ると、多くが「後期から変容期」に該当する、右下の丸で示された地域なのではないかと思います。

この「後期から変容期」に当たる地域については、「全盛期」の地区と比べてまだ詳細な情報が少ないように見受けられるのですが、これは今後さらに調査を進めて深めていく対象地域として位置づけられているのでしょうか。

以上、3点についてお願いいたします。

○清野 信也 氏 まず1点目の資料についてですが、このレガシー形成事業は既に2年連続で実施しておりまして、北海道運輸局のホームページに報告書や概要版が掲載されています。また、この事業を始めるに当たって初年度に「オホーツク遺跡街道構想」という、戦略的な構想もきちんと作っていますので、そういった資料はいつでも御提供できます。御希望があれば遠慮なくお知らせください。

それから、矢ヶ崎先生の御質問と併せてのお話になりますが、この事業の対象エリアは、稚内から道東の標津くらいの範囲まで広く、オホーツク文化が稚内の方から北海道に入ってきて、だんだん南下していき、暖かい地域を目指して最終的には標津・根室あたりでアイヌ文化と融合し、やがて姿を消していったという流れをストーリーとして描いています。

そのストーリーに沿って、オホーツク文化が栄えた地域を順に追っていく形で事業を進めているのですが、エリアがかなり広いので、現時点では紋別・興部地区の方々が中心となって進めています。1年目と2年目は、紋別・興部、網走、北見といった地域を「コアエリア」として設定して、最初から手を広げすぎないように、まずはしっかりと基盤を固めることを重視しています。

将来的には事業の自走化も視野に入れて、今はまだ取り込めていないエリア、例えば北の方では枝幸町など、更に南下していくと斜里、中標津、標津、根室といった地域にも、エリア拡大の流れで取り込んでいこうという意図があります。

「100年後、50年後のレガシーをつくる」という長期的な視点で進めている事業なので、現時点では知床・根室観光連盟が直接関わっているわけではありませんが、今後エリアが広がっていく中で、何らかの形でお声がけがある可能性は十分あると思います。以上です。

○矢ヶ崎座長 よくわかりました。それでは、他に御質問などなければ、これで一区切りとしたいと思います。

清野さん、長野さん、今日は御準備も含めて本当にありがとうございました。こちらで御退席いただいて結構です。どうもありがとうございました。

それではここで、一旦休憩を挟みます。5分ほどの休憩の後、議事を再開したいと思います。再開はこのあと5分後、40分ちょうどからとさせていただきますので、よろしくをお願いいたします。

(休憩)

○矢ヶ崎座長 それでは再開いたしますので、御準備をお願いいたします。

続いて「北方領土隣接地域の観光資源などを生かした、地域一体となった地域振興にも資する取り組み」というテーマでお話を伺ってまいります。

まずは、鮭の聖地メナシネットワーク事務局総括事務局長であり、標津町教育委員会生涯学習課長の小野哲也さんより御説明いただきます。

小野さん、今日はありがとうございました。どうぞよろしくをお願いいたします。

○小野 哲也 氏 皆さんこんにちは。標津町教育委員会の小野と申します。よろしく申し上げます。

今回は、根室管内の歴史文化をテーマにした「鮭の聖地の物語」というストーリーについてお話しさせていただきます。こちらは令和2年に日本遺産に認定されたもので、私はこの日本遺産の推進協議会の事務局を務めております。

現在、この協議会ではストーリーをいかして、根室海峡沿岸地域のエコミュージアム化に取り組んでいます。今日は、その取組についてお話しできればと思っております。ストーリーの詳細に全て触れる時間はありませんので、まずは概要を簡単に御紹介します。

この「鮭の聖地の物語」の特徴の一つとして、まずタイトルにある「鮭の聖地」という言葉ですが、これはアイヌの伝承に由来するものです。北海道東部のアイヌ伝承を丹念に調べて報告された方がいまして、更科源蔵さんという方なのですが、その方の著書の中に、こんな話が紹介されています。

知床沖にいる神様が、袋の中にある魚の骨や鱗を海にばらまくと、それがみるみる鮭の姿になって、人々が暮らす村の川へと登ってくるのだ、という伝承です。この「鮭の聖地」というタイトルは、そういった伝承を基につけられたものでして、この地域に伝わる鮭と人にまつわる数多くのエピソードを一つにまとめたのが、このストーリーというわけです。

そしてもう一つの特徴は、北海道東部、根室海峡沿岸にある一市三町（標津町、根室市、別海町、羅臼町）にまつわる物語になっていることです。これは、北方領土隣接地域の日本遺産として位置づけられています。

この物語の軸になっているのは「鮭を求める人々のつながり」です。物語は、根室海峡沿岸の遺跡に人々が集まってくるころから始まります。やがて根室港が誕生し、北前船が来航することでそのつながりが日本全国に広がっていく。さらに明治時代になると缶詰技術が導入されて、今度はその鮭缶が輸出されることで、世界へと広がっていきます。つまり、鮭をきっかけに人と人との交流が時代とともにどんどん広がっていったんだ、というストーリーの展開になっています。

また、このストーリーの構成を支えている要素ですが、根室地域ってすごく自然景観に恵まれた地域でして、そういった自然を支えている象徴的な存在が「鮭」なんですね。海と川を行き来しながら、いろんな物質循環を担っているという点で、この地域の生態系の中心的な存在といえます。

それだけじゃなくて、歴史文化の面でも、1万年にわたるこの地域の人々の暮らしと深く関わってきました。さらに、今の根室地域で営まれている産業（エビ、カニ、ホタテ、昆布、サンマ、ミルクなど）も、鮭と非常に密接な関係があります。

実は、明治30年から昭和40年ごろまで、鮭がほとんど獲れない時期が続いたのですが、その間に今あるような産業が次々に生まれてきたんですね。つまり、鮭が獲れないからこそ生まれてきた、という側面があるわけです。そういった意味で、鮭とこれらの産業は表裏一体の関係にあるとも言えます。

このように、鮭という軸をもとにストーリーを組み立てることで、この地域の自然、文化、産業の歴史を、起承転結のある形でまとめることができる。そういった構想になっています。

この「鮭の聖地の物語」をいかしたエコミュージアム構想についてお話しします。

まず、このストーリー自体が1万年という非常に長いスパンを持っているので、そのまま活用しようとするとなんとなく使い勝手が悪いという課題があります。そこで、ストーリーの中から特に象徴的な12のエピソードを抽出して整理しています。

その12のエピソードの中でも、各認定市町が特に推したいものを4つずつピックアップして、それぞれの地域で主に発信しているという状況です。もちろんそれ以外のサブストーリーも含めて、12の構成をしています。

また、このストーリーの中には鮭だけでなく、ホタテや昆布といった食に関する地域の生産品も数多く登場します。そういった代表的な8品目をピックアップして、それぞれにまつわる物語を再編集する形で、サブストーリーも作成しています。

こうしたストーリーをいかして、地域全体のエコミュージアム化を進めているのですが、まず拠点となるのが標津町にある「サーモン科学館」です。その2階に、鮭の聖地の1万年の歴史を総論的に伝えるエキシビジョンルームを整備しており、全体像をここで発信しています。

それぞれの市町には郷土資料館などの関連施設があって、そこでは各市町が特に伝えたいエピソードをピックアップして紹介しています。さらに、サブストーリーがそれらの施設同士をつなぐような役割を果たして、根室海峡沿岸地域全体を「鮭の聖地の物語」をテーマとする「屋根のない博物館」のような形になっていく、そんな構想で進めています。

ストーリーを構成する文化財について御紹介します。

まず縄文から古代にかけての標津町の文化財ですが、「標津遺跡群」という伊茶仁川・ポー川流域に広がる遺跡があります。ここは、現在の地表面から窪みとして確認できる竪穴住居跡群が特徴なのですが、さらに、竪穴群が周囲の自然環境（川や森）とともに一体で保存されているという点も特徴となっています。このポー川では、標津観光協会を中心に、カヌー体験なども行われています。

次に古代の羅臼町の文化財に関しては、「松法川北岸遺跡」から出土した資料があります。オホーツク文化の造形品で、ヒグマやラッコなど、今も知床周辺で観測できる動物を象ったものが残されています。こうした資料を見た上で、実際に知床クルーズを体験するといった観光導線も構想されています。

中世の根室市の文化財については、「チャシ跡群」というアイヌの砦跡があり、地元の地域ガイドによるチャシツアーも行われています。また、近世に関する資料としては、司馬遼太郎の小説『菜の花の沖』に登場する高田屋嘉兵衛が創祀に携わった「根室金刀比羅神社」があり、ここでは宮司さんの解説が聞けるようになっています。

さらに、江戸時代末期の標津町の文化財としては、「標津番屋屏風」という屏風絵が描かれており、これは160年前の標津の街の様子を描いた貴重な資料となっています。屏風の中には、赤い鳥居のある標津神社や大きな錨が描かれており、実際に今でもその錨は神社境内に現存しています。この屏風をテーマにした街歩きツアーも行われています。

近代では、別海町の「旧奥行臼駅」が構成文化財の一つになっており、ここではトロッコ体験なども行われています。

そして、地域の「食」も重要な構成要素です。今も現地で食べられる郷土料理などは、ストーリーを象徴するコンテンツとして位置づけられています。

このように、文化財や食を、それぞれの市町の拠点を起点として、ストーリーでつなぎながら、地域全体をネットワーク化していく取組を進めているところです。

この「鮭の聖地メナシネットワーク」の体制についてお話しします。

もともと日本遺産の認定に向けた取組は、標津町の教育委員会をはじめとする各市町の文化財担当部局が中心になって進めてきたという背景があります。そのため、現在の「鮭の聖地メナシネットワーク」の事務局も、各市町の教育委員会や文化財担当者が主軸になって運営しています。代表は、私たち標津町の教育長である山崎が務めています。なお、構成メンバーは教育関係者だけでなく、各市町の観光部局や観光協会、ガイド団体といった観光関連の組織も含まれていて、そうした多様な連携の下で活動を進めています。

具体的な取組としては、例えば「メナシカード」と呼ばれる文化財を紹介したトレーディングカードがあります。構成文化財は全部で36件あるんですが、それらをテーマにしたカードを作って、地域の飲食店などで配布しています。さらに、共通デザインのパンフレットも12種類制作しており、管内のゆかりの施設などで配布を行っています。また、構成文化財のオリジナルカップセルトイを制作していて、郷土資料館で販売しています。加えて、構成文化財のひとつである明治時代に作られていた缶詰のラベルを用いた缶詰を復刻販売したりと、商品開発を行っています。

プロモーション活動については、このストーリーの中に会津藩など他地域の歴史も登場するため、そういったゆかりの地へ赴いて直接プロモーション活動もしています。例えば去年は、会津若松市でPRイベントを行いました。そのときの写真も御覧いただければと思います。

今後の方針としては、これまでは教育部局が中心となって取り組んできた分、どうしても観光や誘客の部分には十分に結びついていないという課題があります。そこで今後は、観光協会を中心とした「観光部会」を新たに立ち上げて、観光振興を強化していきたいと考えています。

以上が、私からの御報告となります。

○矢ヶ崎座長 しっかりとした魅力を形にしたうえで、いよいよ観光部局との連携を強化していくという段階に入っているようです。どうもありがとうございました。

それでは続きまして、中標津町教育委員会 学芸係長の村田一貴さんより、お話をいただきたいと思ひます。

よろしくお願ひいたします。

○村田 一貴 氏 皆さん、こんにちは。改めまして、中標津町教育委員会で学芸員をしております村田と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

私の方も、2016年にビザなし交流で択捉島に伺った経験がありまして、そのときのことを少しお話しさせていただきます。ホームビジットの際に、ロシアの方から「ぜひ見てほしいものがある」と案内されまして、馬頭観音を見せていただきました。これは右下の写真に写っているものです。また、ロシア人の男の子が瀬戸物を見せてくれたりして、日本人が大切にしてきた思いのようなものを、ロシア人の方々もちゃんと受け止めてくださっているのかなと感じる場面がいくつもありました。

それでは、中標津町の概要についてお話しします。お手元の資料、あるいはスライドを御覧いただければと思ひます。

中標津町の人口は現在 22,128 人で、根室管内の中間に位置しています。面積はほぼ琵琶湖と同じくらいです。観光については、国内から年間 228,341 人、国外からは 2,897 人の方が訪れており、コロナ禍以降は回復傾向にあって、右肩上がり増加しています。

産業別で見ますと、第一次産業に従事している方が 1,669 人、第二次産業が 2,324 人、第三次産業が 8,496 人です。この数字を見ると「商業の町」とも言われることがありますが、やはり基幹産業は酪農です。そのため、第二次産業や第三次産業の中にも、酪農に関わる人たちが多く含まれています。

観光地としては、開陽台からこの地域ならではの景観を眺めることができますし、さらには国後島を眺望することもできるということで、たくさんの方々に御来訪いただいています。

さて、本計画ですが、「文化財保存活用地域計画」の作成に当たっては、まず町内にある歴史的建造物の保存や、築 50 年を超え老朽化が進んでいる郷土館本館の建て替えなどが背景にありました。そうした課題を受けて、この計画に基づいて様々な検討を進めてきたところです。

計画を策定した令和 2 年はコロナ禍の真っ只中でして、対面での会議がなかなか開けない状況だったため、オンラインでの開催を挟みながら進めることになり、もともと 3 か年だった計画が 4 か年に延びる形となりました。

中標津町にある文化財の状況としては、町の指定文化財が 1 件、国の登録有形文化財が 5 件あります。ただ、それ以外の「未指定」の文化財がどれほどあるのかということも大きなテーマでした。文化庁の文化財調査官である岡本さんもプレゼンでよくおっしゃっていますが、「地域の魅力を一番よく示しているのは未指定の文化財」なんです。

そこで、協議会とは別に町民活動団体で構成する「調査部会」を立ち上げ、建物の悉皆調査や産業遺産調査を通じて、町民目線で文化財を拾い上げていくべく活動してきました。

さらに、「文化遺産フォーラム」の活動も再開し、町民の皆さんから文化財の候補を募ったり、どうやったら次の世代に継承していけるかといったことを話し合うワークショップも開催したりしました。ここでも町民活動団体がファシリテーターとして関わりながら、様々な人の声を拾い上げ、これまで教育委員会が行ってきた調査とも合わせて、未指定の文化財を 808 件、全体で 814 件までリストアップすることができました。

こうした有形・無形の文化財の形成過程から、中標津町の歴史文化の特性がいくつか見えてきます。一つ目は、「標津川とその支流が支えてきた奥根室の人々の暮らしと産業」です。標津川はこの町の「母なる川」とも言われており、その流域では古代の集落遺跡やアイヌ語地名などを通じて、国内村の人々の暮らしぶりや産業の歴史を知ることができます。近代には町で初めての公共施設として鮭鱒孵化場が造られましたし、昭和 12～13 年頃にはジャガイモから澱粉を作る家内工業が武佐地区に 42 工場も立ち並び、非常に栄えていました。その痕跡も残っています。

もう一つの特性は、「交通を軸に発展してきた町の歴史文化」です。かつて田中角栄氏が「道路は文化、文化は道路」と語ったように、中標津町もまた、交通の要所としてさまざまな時代を象徴する文化が育まれてきました。

古代にはアイヌの人々が斜里山道を通っていたと言われており、やがて近代になると開拓者がその道を使って行き来し、宿泊施設や馬を乗り継ぐ駅通所などが整備されました。その後、泥炭地を越える交通アクセスのため、日本で初めての「植民軌道」が開通し、さらに、大量輸送のニーズに応えるかたちで「国鉄標津線」が整備され、内陸と沿岸を結ぶ交通の大動脈となっていきました。

こうした交通網の変遷が、中標津を根室地域の中核都市へと押し上げていった歴史を今に伝えているのです。

3つ目の特性として挙げられるのが、「先人たちの苦労と成功の積み重ねによって形成された一大酪農地帯が生み出す、根釧台地の風景と歴史文化」です。

もともとこの地域の産業は畑作中心でしたが、冷害や凶作が繰り返される中で、徐々に酪農への転換が進んでいきました。そうした中で、先人たちは様々な苦労と努力を重ね、成功を積み重ねることで、現在のような一大酪農地帯が形成されました。そうして生まれた、この地域ならではの独特な景観こそが、まさに歴史文化の特性を物語っているのではないかと考えています。

また、本州からの入植者が地域の風習や文化を持ち込んだという点も、この地域の成り立ちを語る上で欠かせません。そして、そうした文化の蓄積の中で、先人たちは知恵と工夫を重ねながら産業を築いていきました。その所産の一つが、ブロックサイロや集乳所といった産業遺産であり、現在もその姿を残しています。

このように、中標津の歴史文化は、標津川と暮らしの関係、交通の要所としての歴史、酪農の地としての風景と産業、という3つの特性によって構成されているのが特徴です。

そして、こうした歴史文化をベースにストーリーを紡いでいく取組が、『なかしべつ遺産「標」』です。先ほど小野さんから御紹介があったように、これは日本遺産のように、文化財の背景にあるストーリーに光を当てることで、これまで価値が見いだされてこなかった未指定の文化財にも意味を与え、保存・活用につなげていこうという考え方です。

「標」という名前は、道しるべという意味で、次の世代に文化を伝える指針となるようにという願いを込めて、地名の「標津」にもかけて名付けました。

『なかしべつ遺産「標」』は、6つのストーリーで構成されていて、例えば交通や産業といったテーマごとに「これだけは伝えたい」というポイントを短い文章で表現しています。現在は「中標津シルベめぐり」という形で情報冊子にまとめられており、今後は札幌の丘珠空港や東京、新千歳空港、アンテナショップなどでも配布し、中標津のPRや地域の魅力発信につなげていきたいと考えています。

こうした活動を通じて、「地域にとって何が大切か」「何が誇りか」といったことを見える化し、地域らしさ＝中標津らしさを発信していこうというのが狙いです。

今回の計画作成に当たっては、委員の先生方から「中標津は北方領土に隣接する地域であること、過疎化が進み厳しい状況にあることは確かだけれども、この地域が元気になることは、ひいては国益にもつながる」といった御意見もいただいています。

だからこそ、文化財をしっかりと保存し活用していくことが大切であり、基本方針として「価値を広め、文化財を守り生かす」「次世代継承に向けた仕組みを構築する」といった将来像の実現に向けて、保存活用の方針・措置を設定しました。

その中でも重点施策の一つが「中標津しるべつなぎ構想」です。これは小野さんの報告にもありましたが、日本遺産の考え方や山口県萩市の「まちじゅう博物館」構想などを参考にしながら、町全体を博物館と見立て、町民が文化財をより身近に感じ、共有していく仕組みをつくっていこうという取組です。

その中核となるのが、「旧北海道農事試験場庁舎」であり、ここをコア博物館として位置づけ、周辺に点在する文化財をめぐる構想を描いています。このコア博物館には、展示機能だけでなく、観光

インフォメーション機能や、札幌の長山邸のように、歴史文化情緒をいかした町民活動や会議、レセプションなどを行うスペースも併設し、ふるさとへの愛着や誇りを育む拠点として整備していきたいと考えています。

さらに、周辺には開陽台や養老牛温泉、中標津空港などのスポットがあります。これらの場所はそれぞれが文化財であり、文化的景観を一望できる場所でもあり、とりわけ開陽台からは北方領土を眺望することができます。こうした視点も含めて、博物館機能と組み合わせながら、ストーリーとして伝えていけたらと考えています。

また、この『なかしべつ遺産「標』』のストーリーを軸に、文化財をめぐるたり、実際に格子状防風林の中で体験したりするようなプログラムに活用する構想もあります。

例えば上武佐では、ハリストス正教会に所蔵されているブロンズのキリスト像があります。これは、色丹島から持ち出されたもので、左手首が折れています。というのも、元島民の方がロシア侵攻の際に急いで引き揚げる際、何としても持ち出そうとした結果、そのような損傷を受けたとのこと。こうした歴史的な所産も、「標」のストーリーを通じて丁寧に伝えていけたらと思っています。

詳細なお話は時間の関係で割愛しますが、こうした様々な価値を持つ総合博物館周辺を、文化財保存活用区域エリアとして設定しています。かつての開場当初の範囲を踏まえてこのエリアを定め、建物の保存活用方針を策定しました。

現在、酪農試験場では一部が試験圃場施設として使われており、今もなお研究活動が続けられています。それはすなわち、地域の産業を支えているという実態があるということでもあります。だからこそ、この営農景観も含めて保存していくという方針をとりました。史跡の指定は受けていないものの、史跡に準ずる形で、保存活用を進めるべきだというのが今回の計画の趣旨となっています。

このように、歴史的建造物としての保存にとどまらず、博物館機能を持たせ、生涯学習の場として、更には観光・商業・産業の振興の拠点としても活用できればと考えています。

文化庁では現在、「ユニークメニュー」の推進にも取り組んでいます。これは、特別な会場でイベントやレセプションを開催することで、特別な体験価値を生み出していくという取組です。旧北海道農事試験場も、まさにそうしたユニークな場にふさわしいと考えています。

この試験場は、昭和8年に地域開発計画が策定された際の基礎となるデータが研究された場所でもあり、根釧地域の酪農の出発点としての歴史があります。そして、この地で育まれた酪農によって、さまざまな特産品が生み出されてきました。そうした特産品を単なる「食べ物」として味わうだけでなく、そこに込められた歴史やストーリーを知ることで、より深い魅力を感じてもらえるのではないかと思います。

文化庁でも「文化財単体では限界がある」として、文化・観光・経済の好循環を生み出すサイクルをつくっていく必要性が語られています。文化財の保存や活用には維持管理費がかかりますが、そうした費用を経済的な循環から生み出す仕組みづくりが、今後の課題でもあります。

そのためには、教育委員会や行政だけで完結するのではなく、さまざまな関係機関との連携・協力が欠かせません。そうした中で、昨年2024年3月14日には、町民活動団体の発意によって「中標津しるべつなぎ会」が発足しました。この団体では、文化財の掘り起こしや、旧校舎の図面作成など、町民主体での活動が活発に行われています。

お手元のフォーラムのチラシにも記載のとおり、戦後80年の節目にあたる7月15日（火）には、フォーラムの開催を予定しています。こうしたフォーラムや情報発信を通じて、北方四島とのつながりや、先人たちの物語を丁寧に掘り起こしながら、今後も広く発信していければと考えています。

以上が、計画の概要となります。御清聴ありがとうございました。

○矢ヶ崎座長 村田さん、非常に内容の濃い御発表をありがとうございました。中標津町では、町民の皆様が主体となって、本当に熱心に取り組まれている様子がよく伝わってきました。文化財を活用しながら地域の未来を描いていく姿勢、非常に印象的でした。

それでは続きまして、北海道総務部北方領土対策本部から御発言をいただきます。お時間が限られておりますが、5分ほどで御説明いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○金野課長補佐 北海道庁北方領土対策課の金野と申します。

私からは、今月7月25日にリニューアルオープンする赤れんが庁舎とその中に設置される北方領土展示室の概要について御説明させていただきます。

御覧いただいている資料は、道のホームページにも掲載されておりますが、リニューアル後の館内の様子となります。館内は地下1階から2階までの構成となっております、

2階は「歴史と文化のフロア」で、北海道の遺産、アイヌ文化と歴史、赤れんが庁舎の歴史などの展示室が設置されます。

1階は「地域情報と交流のフロア」となっており、道内179市町村の魅力を発信するエリアや、北海道の食文化を紹介する物販スペース、レストランなどが設けられます。

最後に地下1階は「学びの継承のフロア」として、樺太関係資料室とともに、隣接して北方領土展示室が設置されます。

次のページ以降には、各展示室の詳しい内容が記載されていますが、お時間の関係もありますので、後ほど御覧いただければと思います。

続いて、北方領土展示室の概要について御説明いたします。コンセプトとしましては、元島民の皆さまの高齢化が進む中で、北方領土問題に対する若い世代の関心を高め、次世代へつないでいく取組が重要であるという認識の下、若い方々にも関心を持っていただけるような展示内容としています。

まず入り口の導入部分では、デジタルサイネージを用いて、北方四島や隣接市町の情報を発信しています。具体的には、根室地域の高校生が制作した北方領土の紹介動画など、若年層の方々にも身近に感じられる内容を提供する予定です。

続いて、北方領土展示室の各コーナーについて御説明いたします。

まず「1. 北方領土の概要」では、北方領土の概要や北方領土問題、また北方四島での暮らしや自然について説明するパネルを設置しています。

次に「2. 現在の北方領土問題に対する取組」では、返還要求運動やビザなし交流、北方墓参などの、北方領土返還に向けた取組などを説明するパネルを設置しています。

「3. 北方領土問題の歴史」では、日魯通好条約など国境をめぐる歴史のほか、日露間の外交交渉の経過について説明したパネルを設置しています。

次に「4. 映像コーナー」では、大型のタッチパネル式のモニターを設置し、北方領土の元島民後継者の語り部と中高生の北方領土サポーターによる座談会や、令和3年度から5年度に実施した北方領土動画コンテストの入賞作品、また、街頭行進や洋上慰霊など、北方領土に関する様々な映像を御覧いただけます。

「5. 署名コーナー」では、個人情報保護の観点などから、ボックス形式の署名コーナーを設置しています。

また、今回、北方四島のジオラマを新たに制作したほか、署名簿に住所や氏名を記載することに抵抗がある方でも返還運動に応援いただける方に、そのお気持ちを表明いただけるよう、応援ボタンを押していただくと千鳥桜の木に一輪の花を咲かすことができる「北方領土返還要求応援デジタルメッセージボード」を設置しています。

以上が、リニューアルオープンする赤れんが庁舎と北方領土展示室の概要となります。この展示室は、北方領土に関する啓発施設の拠点として、観光客をはじめ、国内外の多くの方々にも北方領土問題への関心を持っていただくきっかけとなるよう、興味を引きつける展示内容にしていきたいと思います。皆様も是非機会がありましたら、リニューアル後の赤れんが庁舎に足を運んでいただき、実際に御覧いただければ幸いです。

以上で説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○矢ヶ崎座長 はい、どうもありがとうございました。

それでは、ただいま御講演いただきましたお三方に対して、何か御質問がございましたらお願いいたします。

○渡邊構成員 小野さんと村田さんにお伺いしたいのですが、素晴らしい事業を進めていらっしゃると感じました。その上でお聞きしたいのですが、例えば、古代からの悠久の時代における人類と鮭との関わりのような大きなお話や、近代の開拓者たちの歴史のお話がある中で、私たちが今「北方領土」と呼んでいる島々は古代の人々にとってはただの「島」だったはずですよね。そうした自然との関係や、古代からの人と自然、文化との関わりの中に、あの島々を含めていくようなストーリーを描くことはできないのでしょうか。

○小野 哲也 氏 北方領土というのは、あくまで国境ができて以降の、政治的な区分だと思います。古代の遺跡の時代に遡れば、択捉まで含めて同じ文化圏が広がっているんです。そこは縄文時代から変わることのない、揺るぎない事実です。

ですから、北方領土も含めた根室海峡沿岸は、もともと一つの生活圈だったわけで、そういう意味では、ストーリーとしても一つの物語として語れると思います。

○村田 一貴 氏 私のほうからもお話させていただくと、中標津町にも俣落・西竹地域へ戦後開拓によって人が入ってきた経緯があります。特に、千島列島や北方領土からの引き揚げ者によって開拓が進められた部分もありますので、そうしたストーリーも十分に伝えていけるのではないかと思います。

○渡邊構成員 ありがとうございます。なんとなく、今のお話にすごくヒントがあるように感じました。

「北方領土」といった瞬間に、多くの人々が「触れてはいけない政治的な問題だ」と身構えてしまうところがあるのかもしれませんが、でも、「何千年、何万年というスパンで見たらよ」というふうに伝えることができれば、自然と「あの島々も私たちと共に生きてきたんだ」という感覚を持ってもらえるような気がしました。

そういう視点が、今後の啓発の中にも入ってくるといいなと思いました。ありがとうございます。

○矢ヶ崎座長 重要な御指摘をありがとうございました。「昔から一緒だったんだよ」というところは、やっぱりスッと心に入ってきますよね。

それが生活圈として一緒だった、同じものを食べていた、同じ方向を向いていた、そういう説明をされると、やはり納得感があるというか、説得力があると思います。その点でも、お二方の取組は非常に重要だと感じました。

では、もう一方、佐々木構成員、お願いします。

○佐々木構成員 小野さん、村田さんにお聞きしたいのですが、お二人の本日の御発表からは、「ストーリー」や「物語」を非常に大切にされていることが、強く伝わってきました。

そこでお伺いしたいのですが、そうした物語をつくる際のプロセスにおいて、どのような点に御苦労があったのか、あるいは具体的にどのように進めていったのか、その進行の方法についてお聞かせいただければと思います。

というのも、おそらく啓発施設の今後においても、「どういうストーリーをこれから維持・展開していくか」という点が非常に重要になってくるのではないかと考えています。そうした意味でも、是非お話を伺えたらと思います。

○小野 哲也 氏 まず、日本遺産に認定された「鮭の聖地の物語」についてお話しします。

きっかけは、「標津遺跡群伊茶仁カリカリウス遺跡」という遺跡の価値をどう伝えるかという課題でした。遺跡というと、どうしても昔のものとして捉えられがちで、現代の人々に関心を持ってもらいにくいんですね。そこで、古代と現代をどうつなげるか、という点に重点を置いて考え始めました。

この取組は標津町発信で始まったこともあり、「鮭」に着目することにしました。というのも、標津町は今も鮭を中心とした町づくりを行っており、現代の暮らしの中でも鮭が非常に重要な存在なんです。そして、古代、縄文時代にも同じように鮭を利用していた。そうした連続性に焦点を当てて、時代ごとのエピソードをつなぎながら、ストーリーを構築していきました。

ただ、現在認定されているストーリーの形に至るまでには、3年ほどかかりました。最初の頃は、ただ歴史を年代順に追うようなストーリーで、正直あまり面白みがなかったんです。そこで最終的には、起承転結の構成や、鮭を軸に狩猟文化の精髓なども織り交ぜながら再構成を行い、ようやく3年目に認定に至った、という流れです。

○村田 一貴 氏 うちの計画づくりの際のストーリーの変遷についてお話しします。

最初は、いくつかのストーリー候補を立てました。例えば、町を代表する景観について、「それがどのように作られてきたのか」という視点を軸に考える等、いくつかの切り口で構想を練りました。地域資源とその背景にあるストーリーを草案として出しながら、調査部会の方々が独自に行った調査なども参考にしつつ進めていきました。

その中で、「これは地域の思いとしてどうしても伝えたい」といった意見も多く寄せられました。むしろ委員の先生方のほうから、「地域の思いを大事にした方がよいのではないか」という御意見もありました。

一方で、あまり長々とした文章だと読んでもらえないという課題もあるので、短くてわかりやすく、なおかつキャッチーな言葉で伝えることも重要だという共通認識が生まれました。そういった「引き」や「魅力を伝える言葉」の部分は、委員・調査部会・事務局の間で何度もすり合わせを重ねてきました。

さらに、調査で得られた成果を基に、構成文化財としてどれを含めるかを何度も練り直しながら絞り込んでいった、という経緯があります。

私からは以上です。

○矢ヶ崎座長 たくさんの時間と労力をおかけになったことを端的に説明していただき、お二方とも大変ありがとうございます。

○佐々木構成員 私から北海道庁さんに一つだけお伺いしたいのですが、よろしいでしょうか。

赤レンガ庁舎のリニューアル、非常に楽しみにしております。何ととっても北海道の観光地は札幌圏に多くの方が集まりますので、そこでの発信力が高まるという意味でも、とても重要な取組だと思っています。

そこで一つお聞きしたいのですが、北方領土展示室の中には、例えば現在、隣接地域にある啓発施設のような施設がどこにあるかといった情報や、あるいは実際に「隣接地域に足を運んでみてはどうか」という呼びかけになるような要素は、今後取り入れられる可能性があるのでしょうか。

そのあたりの御感触をお聞かせいただけると幸いです。

○金野課長補佐 御質問についてですが、北方領土の啓発施設につきましては、先ほど御紹介した映像コーナーの大型タッチパネルモニターで、啓発施設を紹介する映像を収録しています。

その映像において、「ぜひ施設等に足を運んでいただきたい」という内容での御紹介をさせていただいております。

○矢ヶ崎座長 はい、ありがとうございます。それでは、お三方、本当に貴重なお時間、そして御準備も含めまして、誠にありがとうございました。これにて御退席いただいて大丈夫です。本当にありがとうございました。

それでは、「中間とりまとめ骨子案」について、事務局から御説明をお願いいたします。

○小林参事官 お手元の資料9を御覧ください。これは今年度の調査研究の1年目としての中間とりまとめ骨子案のたたき台として、皆さんに御議論いただいた上で修正を加えていきたいと考えています。

順番に御説明します。まず1番には今回の調査の経緯を記載しています。2番は「現状と課題」でして、こちらは(1)と(2)に分かれています。(1)の方は、初回からお伝えしているように、隣接地域でこれまでどういった啓発活動が行われてきたかということに記載しています。

(2)の方は、啓発施設の現状と課題についてです。これは施設そのものや展示の状況についてまとめた上で、課題として、例えば老朽化への対応、展示方法や展示物のリニューアル、デジタルの活用、また複数施設がある中でどう位置づけて連携していくか、共通の発信内容と個別の特色をどう両立させるかといったことを挙げています。どこであっても初心者にも分かりやすく親しみやすい展示が求められる点は共通なので、その点も記載しています。

その次ですが、既存データも活用しつつ、新たに来館者がどこから来ていて、どういう目的を持っているかといったことをきちんと分析していく予定です。さらに、施設をより活用してもらうため、イベントの実施状況についても記載しています。

続いて3番、これは次のページになりますが、「今後の対応策の検討の方向性」についてです。

まず(1)は、施設の老朽化についてです。これは皆さん視察で御覧いただいたとおりですけれども、こうした対応にはどうしても時間がかかります。なので、この調査研究の中で議論していくのはもちろんなのですが、一部は先行的・並行的に進める必要があるのではないかと考えており、その点も書かせていただきました。建て替えにせよ補修にせよ、検討に一定の時間がかかるということです。

(2)展示のあり方については、再三御意見いただいているように、それぞれの施設の「特色」、あるいは「使命」をどう明確にしていくかが大切だと考えています。どんなことを伝えようとしている施設なのかという点を、しっかり確認していく必要があります。そういった際には、佐々木先生の御専門の領域でもある「協働型プログラムの評価」や「ロジックモデル」の導入も考えられます。

それから、施設間の連携も重要です。今日の得能さんのお話にもありましたが、元島民やその後継者の方々とどう連携を深めていくかも大きな課題です。そのつながりの中で、記憶の継承だけでなく、活動そのものの継承も啓発施設の役割として担っていく必要があるのではないかと考えています。

また、展示のリニューアルについては、どんなメッセージを中心に据えるかが重要です。展示はそのままにしておくとすぐに陳腐化してしまうので、どうやって持続可能な形で入れ替えていくのかという仕組みも必要と考えられます。また1年を通じて同じものを出しっぱなしにするのではなく、企画展やワークショップなども含めて、柔軟な対応も必要かと思われます。

くわえて、先生方の視察時にも御質問がありましたが、職員の方や、ボランティアとしてガイドしてくださる方などの対応についても、今後検討していく余地があると思います。また、デジタルの活用や、施設そのもののPRの在り方についても課題として挙げています。

(3)は、施設そのものというよりも「どうやって多くの人に来てもらうか」という観点からです。観光との連携を中心に考える必要があると思っています。

例えば、一市四町にどうやって人を呼び込むか。これは宿泊や交通の利便性の向上といった課題にも関わってくると思います。せっかく来ていただいたのに、啓発施設に立ち寄らない方がいるとすれば、その人たちにどうやって来てもらうかが次の課題です。

そうしたときに、他の観光施設とどう連携していくか、また地域の中で啓発施設をもっと活用してもらうにはどうしたらいいのかということも考える必要があります。

佐々木先生から前回御指摘いただいた「文化的コモンズ」という考え方や、視察の中でも出てきた「移住者の方、地域おこし協力隊の方などどう連携していくか、また関係人口をどう維持し拡大していくか」といった点についても、記述していければと考えています。

以上となります。今日もコメントをいただきたいですし、後から思いついたことでもメモなど何でも構いませんので、是非御意見をお寄せください。より充実した内容にしていければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。今年度は中間とりまとめまで、ということで、最終的なゴールは対応策の方向性まで書けていれば良いということになっております。ですので、今回のような目次というか、中身の構成について最低限何が必要かという観点から、事務局にたたき台を出していただきました。

それでは、よろしければ構成員の皆さまお一人お一人から、現時点での御意見や御感想を簡単にいただければと思います。まずは渡邊構成員、お願いいたします。

○渡邊構成員 今日お話を伺った方々のエッセンスを、はっきりとキーワードとして盛り込んだ方がよいのではないかと感じました。例えば、得能さんのお話からは「使命感」や「語り伝えたいという意思」といったキーワードを含めるべきだと思います。

また、半田さんのような方がいらっしゃることに私はとても驚きました。後継者を「育成」するとか「支援」するとか、そこまで踏み込んだ表現を目指してもよいのではないかと思います。つまり、そういった人たちを施設やネットワークの中で育てていくという意義ですね。

さらに、小野さんや村田さんの御発表も非常に印象的でした。北方領土だけを見ていると、どうしても視野が狭くなってしまう可能性があります。豊かな自然や人類の歴史といった誰もがロマンを抱けるような大きな枠組みの中に北方領土を位置づけるストーリーが出てくると、より魅力が増すと思います。もっと知りたい、行ってみたいという気持ちが高まるかもしれません。

どうしても「北方領土」という言葉が出た途端にセンシティブな扱いになりがちですが、むしろ「素敵な場所だから知りたい」という包摂的な、ポジティブなメッセージが伝わるようにしたい。今の目次構成では少し深刻なニュアンスが出過ぎている印象もあるので、自然や人類史といった要素を含めることで、より魅力的な表現にできるのではないかと思います。

もう一つお伝えしたいのは、実は去年現地を訪れた渡邊研のメンバーが「また行きたい」と言っています。まさにこの「大学等のゼミとの交流の状況」という点において、良いモデルケースになってくれると思っています。

交流というよりは、もう合宿のような形で、例えば夏のゼミ合宿にこの展示館を使ってもらう、そういったスタイルを全国に向けて打ち出していけるとよいのではないのでしょうか。先ほど出ていた「修学旅行の候補地に」という話ともつながってくると思います。

ぜひ来てください、ぜひ使ってくださいと積極的に呼びかけるくらいの姿勢で持ちかけると、より強いメッセージになるのではないかと思います。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。「ゼミ合宿で使う」というのは、まさにそうだと思います。宿泊できる場所の情報も併せて提供できると、使い勝手が良くなりますよね。食べ物も間違いなく美味しいです。

では、続いて本間構成員、お願いいたします。

○本間構成員 ありがとうございます。全体を見ていて感じたのは、やはり展示そのもののイメージについてです。渡邊先生のお話にもありましたが、地域としての魅力を打ち出しつつも、この状況

を真剣に伝えるという展示のあり方、そのイメージをどう全体としてつくっていくのか、そこが大切だと思いました。

もちろん、実際に具体的なデザインを担当する方が仕上げていく部分にはなると思うんですが、その前提となるイメージの方向性、例えばどういう雰囲気を目指すのかといった部分について、ある程度道筋が見えてくるといいなと、この全体の流れを見て感じました。

それから、先ほども申し上げたのですが、積極的に意見を残してくれる人や、そもそも意見をあまり書いてくださらないような方々、そういった方たちが実際に施設を見たときに何を感じているのか、そこを何らかの方法で引き出せると良いと思います。興味を持ってきた人ではない方々が、どのような展示に目を留め、どんなメッセージを受け取って帰っていくのか、そういった視点も大切だと考えました。

○矢ヶ崎座長 この啓発施設というのは、もともと興味のある人だけが知っていればいいという類の施設ではなくて、できるだけ広く、より多くの人たちに少しでも心に残るような形で届けていくことが目的ですね。ですので、今、本間構成員がおっしゃったように、リアクションを示さない方々、つまり、アンケートに記入しなかったり、感想を残さないような方々についても、どう受け止めているのかという点で、何らかの調査を行っていただけるとよいのではないかと思います。

佐々木構成員、いかがでしょうか。

○佐々木構成員 本日も充実した会議でした。最初に渡邊構成員が言っていたように、展示の見せ方というのはもちろん大事で、それは外に向けてどうコミュニケーションを取るかということに関わっていると思います。ただ、それと同じくらい大事なのが、今日得能さんや本見さん、半田さんのお話を聞いて感じた、啓発活動の「内部」に関することです。例えば、組織をどう維持して、どう成長させていくか。あまり「組織強化」という言い方は好きではないのですが、インナーマーケティング的な視点、つまり内部の人たちのモチベーションや関係性、運営体制など、そういう「内側のコミュニケーション」ももう一つの大きな課題なのではないかと感じました。

また、小野さんや村田さんのお話を聞いていると、私も渡邊先生と同じように、今のたたき台の内容だとちょっとしんどくなると言いますか、視野が狭くなってしまいそうな印象も受けました。もう一つ大きな視点が必要で、例えば同心円的に世界を広げていって、「人類史」とか「人間に寄り添うような感情」とか、そういうものが伝わるようになれば、当然展示の作り方も変わってくると思うんです。そうなってくると、施設自体も「北方領土を返還すべきだ」といった強いメッセージを押し出す場というよりも、もっとクールなメディア、つまり来館者がそこで何かの課題を自分で発見して、主体的に考えられるような空間にしていくというスタンスも、あり得るんじゃないかと。

例えば虎ノ門の領土・主権展示館を見たときに、私はかなり熱いと感じました。「ホット」なメッセージが全面に出ていて、それも一つの在り方だと思いますが、個人的には「ちょっと距離がほしいな」と思ったんです。北方領土の所管施設の展示では、もっとクールで、訪れた人が課題を持ち帰るような、そういう在り方もあっていいのではと、改めて感じました。

○矢ヶ崎座長 はい、ありがとうございます。おそらく今お話しされた三名の方に共通していることだと思いますし、私自身もそう思いますし、おそらく楓構成員も同じお気持ちなのではと思います。やはり今回これだけ豊かで密度の高いヒアリングができたので、そこで出てきた大事な言葉は、なるべくそのまま使っていくべきだと思うんです。その言葉自体が継承すべきものであると同時に、今も生きている言葉だと思いますし、北方領土について語るうえで非常に適切で力を持った言葉になると思うので、それを大事にしていきたいです。

それから、報告書の「はじめに」あるいは前文のようなところで、「そもそも現在北方領土と呼ばれるこの地域は昔から一体的な生活圏であり、非常に豊かな取組や文化があった」という事実を、例えば中標津や標津町で行われているような実際の取組に触れながら、まず冒頭でしっかり伝えるのが

良いのではないかと思います。その上で啓発施設の役割についても、「豊かな広がりを持つ土台がある地域を扱っている啓発施設なのだから、そこに訪れる人たちが自分で考え、深く学ぶことができるような施設であるべきだろう」というような形で書いてあると、最後に出た「ゼミで使ってください」という話にも繋げやすいのではないかと感じました。

もちろん、行政文書としてあまりにカジュアルになりすぎると難しい面もあるかもしれませんが、構成員の中には優れた才能を持つ方がたくさんいらっしゃいますので、みんなで協力して、読み手の心に届くような「はじめに」を練っていくのも良いのではないかと思います。

他にも御意見はあるかと思いますが、時間も押しておりますので、たたき台に対するコメントについてはまた後ほど、事務局にお寄せいただく形をお願いできればと思います。

○佐々木室長 北海道根室地域本部の佐々木と申します。オブザーバーの立場ではありますが、最後に2点だけ、短く確認させていただきたいと思います。

まず1点目です。今回の資料9中間まとめ骨子案の中に、課題として「施設自体の老朽化への対応」という記述がありますよね。これは委員の先生方に確認したいんですけども、本日事務局から出された資料、特に6月に実施した現地視察の報告がありましたが、それを見ると、各施設の概要や特徴は書かれているものの、課題についての言及がないように見受けられます。

ただ、この中間とりまとめでは老朽化への対応が明記されていますので、この場では3人いらっしゃるかと思います。視察に参加された委員の方から、現地を見た上での老朽化に対する課題意識や問題意識があったのか、所感をお聞きしたいと思います。どなたでも結構ですので、お願いします。

2点目ですが、これは事務局に対してです。資料9中間とりまとめ（骨子案）の裏面にある3 対応策の検討の方向性（1）施設自体の老朽化への対応の中で、「一部先行的・並行的に取り組む」と書かれている部分があります。これに関して確認したいのは、「一部」という言葉が何を意味しているのか、もう少し具体的に御説明いただけないでしょうか。

例えば、施設が複数ある中で、一部の施設のみを先行して取り組むという意味なのか。それとも、どの施設であっても、ハード面（建物や設備）だけを先行して整備して、ソフト面（展示内容や運営方法）は後でじっくり考える、という機能の一部という意味なのか。そのあたりの意図を教えてくださいたいと思います。

以上の2点になります。どうぞよろしくお願いいたします。

○矢ヶ崎座長 ではまず、6月の視察に参加された佐々木構成員、本間構成員、そして私の順番でお答えさせていただきます。

○佐々木構成員 ミュージアムの研究をしている立場から言うと、施設のハード面については、本当に早急に手を打つ必要があると感じました。展示の手法もかなり旧態依然としていて、メンテナンスもされていない状況です。なので、その点については、書かれていないこと自体に違和感はなく、言わずもがなというか、当然のこととして認識されているのかなと感じていました。ここに書かれているとおり、老朽化は最も大きな課題だと思っています。

○本間構成員 私も、言わずもがなという感じではあるんですけど、やっぱり展示の方法もそうですし、匂いとか、五感に訴える部分に古めかしさを感じるころがありました。特に若い世代が来たときに、最初に入ったときの印象がその後の内容の受け止め方に影響してしまうと思うので、全体を変えることはもちろんなんですけど、そういったちょっとした部分が大きく響くという点は、今のままだともったいないなと感じています。

また、老朽化した施設や、すぐには建て替えられない施設という点で言うと、私は沖縄のダム施設に関する子ども向けの展示などを扱ってきたのですが、そうしたところでは子ども向けにダンボール製の簡易な展示物を使ったり、更新頻度を高く保てる工夫がされていました。すぐに固定的な展示が

難しい場合は、そういった簡易的で回転の早い展示方法を導入するなど、早急な対応が必要だと感じました。

○矢ヶ崎座長 老朽化については、私も同感です。加えて言うと、双眼鏡のような観覧用の機材も少し古く、うまく機能していないものがありました。老朽化については、どなたも異論のないところだと思います。

○小林参事官 事務局への御質問についてですが、「一部先行的・並行的に取り組む」という表現に関しての御説明をさせていただきます。「一部」というのは、今後の検討の進み具合によって、例えばどこか一つの建物から先に始める場合もあるし、一つの建物の中でも特定の部分だけ先に着手する、というケースもあると思っています。ですので、まだ確定的ではなくて、検討次第ということです。

通常であれば、2年間の調査研究が終わってから具体的な動きに入るのが役所のやり方なのですが、先生方からも御指摘のあった通り、待たなしの部分もありますので、できることは先行して、あるいは並行して取り組んでいくべきではないかという考えから、このように記載させていただきました。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。

長時間にわたって本当にありがとうございました。本日の議事は以上となります。
それでは最後に、事務局からの事務連絡をお願いします。よろしくをお願いします。

○事務局 はい、ありがとうございます。本日は皆さま、長時間にわたり御議論いただき、誠にありがとうございました。いただいた御意見を踏まえて、今後の調査研究を進めてまいります。

本日の議事録については、事務局で作成の上、御発言いただいた方に確認をお願いする形になりますので、よろしくお願いたします。

また、次回の日程などにつきましては、後日御連絡いたします。

事務局からは以上となります。

○矢ヶ崎座長 ありがとうございます。

以上で第3回有識者会議は終了でございます。皆様本日はありがとうございました。